

令和7（2025）年度ヤナギムシガレイ太平洋北部の資源評価

水産研究・教育機構

水産資源研究所 水産資源研究センター（藤原邦浩・下光利明・鈴木勇人・森川英祐・時岡 駿・富樫博幸・永尾次郎）

参画機関：青森県産業技術センター水産総合研究所、岩手県水産技術センター、宮城県水産技術総合センター、福島県水産資源研究所、福島県水産海洋研究センター、茨城県水産試験場、千葉県水産総合研究センター

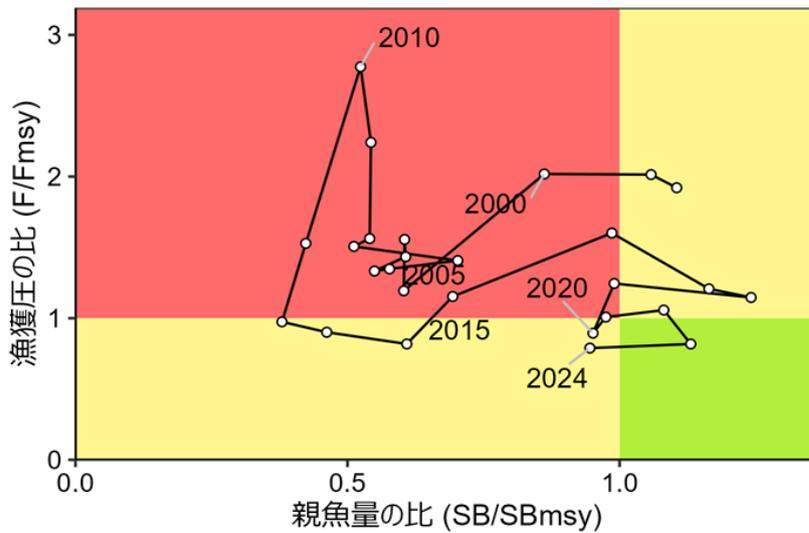
要 約

ヤナギムシガレイ太平洋北部の資源状態について本資源の主漁場である金華山～房総海区の沖合底びき網漁業の標準化 CPUE を考慮したチューニング VPA（コホート解析）により推定した。本資源の漁獲量は周期的に変動しており、1998 年には過去最高の 386 トンを記録した。2001 年には 133 トンまで急減したが、その後徐々に増加し、2009、2010 年には 200 トンを超えた。東日本大震災（以下、「震災」という）以降は、主漁場である福島県沖の漁獲圧の低下などにより漁獲量は 2012 年には 69 トンまで減少したものの、2016～2023 年は 172～248 トンに増加した。2024 年は暫定値ではあるものの 149 トンと前年（173 トン）よりやや減少した。コホート解析で推定されたヤナギムシガレイの資源量は 1990 年代後半に多かったが、2000、2001 年にかけて減少した。震災後、資源量はやや減少したが、2013～2015 年級が多かったことから 2017 年には過去最高の 1,239 トンに達した。2018 年以降は緩やかな減少傾向となり、2024 年の資源量は 757 トンであったが、この値は 2000 年代前半や震災直後よりは高い値である。

令和4年8月に開催された「管理基準値等に関する研究機関会議」において、本資源の再生産関係にはホッケー・スティック型が適用されており、これに基づき推定された最大持続生産量（MSY）を実現する水準の親魚量（SBmsy）は 758 トンである。この基準に従うと、本資源の 2024 年の親魚量は 717 トンで、MSY を実現する水準を下回る。親魚量の動向は直近 5 年間（2020～2024 年）の推移から「横ばい」と判断される。また、本資源に対する 2024 年の漁獲圧は SBmsy を維持する漁獲圧（Fmsy）を下回る。

本資源では、管理基準値や将来予測など、資源管理方針に関する検討会の議論をふまえて最終化される項目については管理基準値等に関する研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。

要 約 図 表



最大持続生産量(MSY)、親魚量の水準と動向、および ABC	
MSY を実現する水準の親魚量 (SBmsy)	758トン
2024 年の親魚量の水準	MSY を実現する水準を下回る(0.95 倍)
2024 年の漁獲圧の水準	SBmsy を維持する水準を下回る(0.79 倍)
2024 年の親魚量の動向	横ばい
最大持続生産量 (MSY)	197トン
2026 年の ABC	-
コメント: ・ ABC は、本資源の漁獲シナリオが「資源管理方針に関する検討会」で取り纏められ、「水産政策審議会」を経て定められた後に算定される。	

直近5年と将来2年の資源量、親魚量、漁獲量、F/Fmsy、および漁獲割合					
年	資源量 (トン)	親魚量 (トン)	漁獲量 (トン)	F/Fmsy	漁獲割合 (%)
2020	976	721	172	0.89	17
2021	940	739	179	1.01	18
2022	1,030	820	196	1.06	18
2023	950	858	173	0.82	18
2024	757	717	149	0.79	20
2025	1,093	867	261	1.12	23
2026	1,032	815	-	-	-

・ 2025、2026年の値は将来予測に基づく平均値である。

・ 近年、本資源は成長の鈍化とそれに伴い1歳魚の多くが漁獲対象となっていないことが考えられ、コホート解析による最近年（2024年）の加入尾数は過小評価している可能性が高いと判断される。そのため、将来予測では、最近年の加入尾数は再生産関係式から予測された値（4,750千尾）を外部から与えた。

English title (authors)

Stock assessment and evaluation for willow flounder in northern Pacific (fiscal year 2025)

(Kunihiro Fujiwara · Toshiaki Shitamitsu · Yuto Suzuki · Eisuke Morikawa · Shun Tokioka · Hiroyuki Togashi · Jiro Nagao)

1. データセット

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり

データセット	基礎情報、関係調査等
年齢別・年別漁獲量、漁獲尾数	<ul style="list-style-type: none"> ・県別漁獲統計(農林水産省・各県水試調べ) ・太平洋北区沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計資料(水産機構) ・全長、年齢測定データ(水産機構、福島県、茨城県) ・市場買い付け ・カレイ類分布調査(水産機構、着底トロール、6月) ・漁獲量調査(青森～千葉(6)県) ・市場データ
資源量指数	<ul style="list-style-type: none"> ・太平洋北区沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計資料(水産機構)*
成熟年齢	<ul style="list-style-type: none"> ・月別精密測定調査(水産機構、福島県、茨城県) ・市場買い付け ・カレイ類分布調査(水産機構、着底トロール、6月)
自然死亡係数(M)	年当たり $M=0.250$ を仮定(田中 1960)

*はコホート解析 (Virtual Population Analysis, VPA) におけるチューニング指数の算出に使用した情報・調査である。

2. 生態

(1) 分布・回遊

本種は日本各地に広く分布しているものの、太平洋岸の分布は北海道噴火湾以南であり(中坊・土居内 2013)、太平洋北部は分布の北限域にあたる(図 2-1)。そのため漁獲も茨城県や福島県沖(房総、常磐海区)を中心に行われており、青森県では少ない。福島県の標本船調査による漁獲量、単位努力量あたりの漁獲量(CPUE)の月別変化を見ると、水深 50~200 m が主漁場となっており、CPUE は 4~11 月には水深 120~140 m で高く、12 月~翌年 3 月には水深 80~100 m で高い。また、漁場も冬季の方が南北に広がっていることから、季節によって若干の移動をすると考えられる(島村・五十嵐 2000)。

(2) 年齢・成長

東シナ海・黄海(西海区水産研究所 1957)、山口県沖合(中原 1969)、若狭湾(Yabuki 1989、柳下ほか 2005)および福島県沿岸(橋本 1955、島村・五十嵐 2000)において成長に関する情報が報告されている。水域間で成長パターンは異なるが、いずれの水域でも 5 歳前後までは急速に成長する。雌の方が雄より成長が早く、寿命も長い。福島県沿岸では、1955 年以前と 1998~1999 年に採集された個体について年齢と体長との関係が示されており(橋本 1955、島村・五十嵐 2000)、雌雄ともに 1955 年以前よりも 1998~1999 年の方が成長は早い。また、寿命は雄では 6 歳、雌では 20 歳と報告されているが(島村・五十嵐 2000)、10 歳以上まで生きる雌は稀である。

なお、近年の成長式および体長-体重の関係(島村・五十嵐 2000)は以下のとおりであ

る（図 2-2）。

$$\begin{aligned} \text{雄} : SL &= 305.1(1 - \exp(-0.220(t + 0.948))) \\ BW &= 5.4 \times 10^{-6} SL^{3.167} \\ \text{雌} : SL &= 337.7(1 - \exp(-0.300(t + 0.042))) \\ BW &= 2.6 \times 10^{-6} SL^{3.318} \end{aligned}$$

ここで、SL は標準体長（mm）、t は年齢（起算日は 1 月 1 日）、BW は体重（g）である。

(3) 成熟・産卵

太平洋北部においては福島～茨城県沖に産卵場が確認されている。産卵期は 10 月～翌年 7 月で、北ほど遅いとされる（坂本 1984）。福島県の沿岸では、1～3 月をピークに 6 月まで続く（Narimatsu et al. 2007）。成熟個体が通常の分布水深よりもやや浅海域の南北に広い範囲で漁獲されていることから、水深 100 m 前後の広い範囲で集団繁殖場を作らずに産卵していると考えられる。成熟体長は雄で体長 120 mm 以上、雌で 150 mm 以上である。雄では満 2 歳で多くの個体が成熟し、雌では満 2 歳の一部と 3 歳魚以上のほとんどが成熟しているが、年齢別の成熟率は年代によって異なることが明らかになっている（島村・五十嵐 2000、Narimatsu et al. 2007、図 2-3）。親魚量の計算では、2 歳の成熟率を 0.3、3 歳以上の成熟率を 1 とした。

(4) 被捕食関係

餌生物は多毛類と甲殻類が主で、若齢期には甲殻類を主食とするが、成長にともない多毛類が主食になる（五十嵐 1980、五十嵐・島村 2000）。なお、被食に関する情報は報告されていない。

3. 漁業の状況

(1) 漁業の概要

本州太平洋北部海域において、ヤナギムシガレイのほとんどは沖合底びき網漁業（以下、「沖底」という）もしくは小型底びき網漁業（以下、「小底」という）で漁獲されている（図 3-1、表 3-1）。寒流系の種ではないため、本海域の南側に位置する福島県と茨城県での漁獲が多く、北側の青森県では少ない（図 3-1、3-2、表 3-1）。

(2) 漁獲量の推移

全ての漁業種類の漁獲量データは 1997 年から利用可能であり（ただし千葉県は 2001 年以降）、1997～2000 年には 288～386 トンを記録していた（図 3-1、表 3-1）。2001～2008 年には 133～179 トンで 1998 年のピーク時（386 トン）の半分以下で推移していたが、2009、2010 年には 220 トン前後に増加した。震災の起きた 2011 年には大きく減少したが、2016～2018 年には 238～248 トンに回復した。その後はやや減少し、2024 年は前年より 24 トン減少して 149 トンであった。

沖合底びき網漁業漁獲成績報告書の集計値によると、沖底漁獲量は 1970 年代前半には

210 トン以上を記録していたが、その後減少し、1980 年代後半から 1990 年代前半にかけては 18~30 トン前後と非常に低い水準で推移した（図 3-2）。1990 年代中盤から急激に増加し、1998、1999 年には 240 トン以上となり過去最高の漁獲を記録した。しかしその後は減少に転じ、2001 年には 100 トンを下回った。2001 年以降は再び徐々に増加し、2009 年は 144 トン、2010 年は 160 トンとなった。2011 年以降は震災の影響で大きく減少した（2012 年には 53 トン）ものの、2016~2024 年は 87~139 トンに回復している。

1998 年から 2024 年までの年別年齢別漁獲尾数の推移を図 3-3 および補足表 2-1 に示した。全年齢の漁獲尾数は、2010 年以前では 127 万~429 万尾で推移したのち、2011~2014 年は震災の影響で 69 万~116 万尾と大きく減少した。その後 2016 年に 338 万尾と大きく増加したのち、現在にかけて減少している（2024 年は 160 万尾）。また、2016 年以前は 1、2 歳魚が漁獲の主体であったが、2017 年以降は 3 歳魚以上が主体となっている。

(3) 漁獲努力量

金華山~房総海区の沖底の有漁網数（漁船ごとのヤナギムシガレイが漁獲された日の網数の合計）は 1990 年代後半に急増した（図 3-4、表 3-2）。その後は 2010 年まで増減を繰り返しながら減少したが、1990 年代前半以前と比較すると高い水準にあった。震災の影響で主漁場である常磐海域の網数が大きく減少したため、2011~2013 年は全体で 10,000 網を下回ったが、その後は徐々に回復し、2024 年は暫定で 19,276 網となっている。

4. 資源の状態

(1) 資源評価の方法

1998~2024 年の年齢別漁獲尾数を用いてコホート解析によって資源量を推定した。年齢別漁獲尾数は茨城県と福島県で漁獲されたヤナギムシガレイを用いて毎年作成している前後期別（1~6 月と 7~12 月）、雌雄別の全長階級別年齢組成（age-length key）と、福島県・茨城県の漁獲物の全長組成をもとに求めた（図 3-3、補足表 2-1）。コホート解析は、1~7 歳以上の 7 年齢群について解析を行い、年別年齢別資源尾数および漁獲係数 F を推定した（補足資料 2、補足表 2-1）。加えて、チューニング指数としてヤナギムシガレイの主漁場である金華山~房総海区の標準化 CPUE を用いた（補足資料 7）。また、ヤナギムシガレイの寿命や成長には雌雄差があるが、年齢別の性比の情報が得られていない。年齢査定の結果から、雄はおおむね 6 歳まで確認されており、7 歳以上の個体は稀であるため、各年齢の体重には、6 歳以下は雌雄の平均体重の平均値、7 歳以上では雌の年齢別の体重を用いて資源量を計算した。この年齢別体重と先に求めた年齢別資源尾数を用いて年齢別の資源量を計算した（補足表 2-1）。

令和 3 年度までの評価では震災の影響を考慮し、主要な漁場である金華山~房総海区の沖底有漁網数から稼働率を算出し、最近年の F に乗じて補正していた。しかし、近年は福島県における試験操業が終了し、本格操業に向けた取り組みがなされているとともに漁獲の中心であるこの海域での漁獲量が増加してきたことから、一昨年度から標準化 CPUE を指数として VPA のチューニングを行っている。そのため、稼働率で補正したコホート解析の結果は補足資料 8 への記載に留めた。

(2) 資源量指標値の推移

主要な漁場である金華山、常磐および房総海区の沖底のノミナル CPUE（年間漁獲量/年間有漁網数）を図 4-1、表 3-2 に示した。また、沖底のノミナル CPUE から年、季節および海域の影響を除去する CPUE の標準化を行い、資源量指標値とした（図 4-2、表 3-2、補足資料 7）。1973 年以降のノミナル CPUE および標準化 CPUE の増減は沖底漁獲量の増減と類似しており、漁獲が少ない年には低い傾向が認められた。2001 年以降では、各海区のノミナル CPUE は 2009～2012 年に比較的高く、2013 年および 2014 年にはやや低くなっていた（図 4-1）。2016 年以降は海区ごとに変動が異なり、金華山海区では緩やかに減少、房総海区では 2016 年に過去最高を記録した後に急減し、常磐海区では 2018 年に過去最高を記録した後は減少傾向ではあるものの、2024 年も高い水準を保っている。金華山～房総海区を合わせたノミナル CPUE では 2016 年をピークとして減少はしているものの、2024 年も高い水準を維持している（図 4-1）。標準化 CPUE はノミナル CPUE と類似した傾向を示し、2018 年をピークとして減少し、2024 年は 2000 年代前半と同等の平均的な水準となっている（図 4-2）。金華山から房総海区において本種の重要性は高く、本種を主要な対象とした操業も行われている（島村・五十嵐 2000）。そのため、これら海区の CPUE は資源状態を表す指標として有効であると考えられる。震災直後には漁獲の中心である常磐海区での漁業活動が限定的となったため、指標としての精度は震災以前に比べると低下している時期もあったが、漁業活動は回復しつつあることから、指標値としての精度も向上していると考えられる。

(3) 資源量と漁獲圧の推移

コホート解析により推定された年齢別資源量および親魚量、年齢別資源尾数、1 歳魚の加入尾数および再生産成功率の推移を図 4-3～4-5、表 4-1 および補足表 2-1 に示す。資源量は 1998 年の 1,205 トンから減少し、2001～2013 年は 423～689 トンで推移していた（図 4-3）。その後 2015 年は 966 トン、2017 年には過去最高の 1,239 トンと増加したが、2018 年以降はやや減少し、2024 年は 757 トンと推定された。年齢別にみると、2017 年以降は 3 歳魚以上が占める割合が増加している。親魚量は 1998 年の 838 トンから減少し、2001～2015 年には 288～533 トンで推移していた。2016 年以降は大きく増加し、2018 年には過去最高の 942 トンとなり、2024 年は 717 トンと推定された。

資源尾数も高い水準であった 1998 年の 1,536 万尾から減少し、2000～2013 年は 622 万～1,052 万尾で推移していた（図 4-4）。その後 2014 年から急増し、2016 年に過去最高の 2,246 万尾を記録した後は減少し、2024 年は 1,132 万尾と推定された。資源量と同様、資源尾数も 2017 年以降は 3 歳魚以上が占める割合が増加している。加入尾数（1 歳魚）は 2013 年まで 155 万～590 万尾で推移していたが 2014～2016 年に 857 万～1,070 万尾と急増し、その後緩やかに減少したものの、2017～2021 年は 431 万～810 万尾と比較的良好な加入が認められた（図 4-5）。2024 年の加入尾数は不確実性が高いものの 130 万尾とこれまでよりも低く推定されている。再生産成功率（1 歳魚加入尾数/前年親魚量）も 2013 年までは 2.44～12.3 尾/kg と比較的安定して推移していたが、2014～2016 年に 16.8～30.6 尾/kg と急増した。その後は減少し、2017～2023 年は 2.9～11.2 尾/kg と急増前と同程度の水準となり、2024 年は不確実性が高いもののさらに減少して 1.5 尾/kg と過去最低となった（図 4-5）。

ただし、近年、本資源には成長の鈍化が起きており、それに伴い1歳魚の多くが漁獲対象となっていないことが考えられ(図3-3)、コホート解析による最近年(2024年)の加入尾数は過小評価している可能性が高い(補足図2-2)。

コホート解析に使用した自然死亡係数(M)の値が資源計算に与える影響を検討するために、Mを変化させた場合の2024年の資源量、親魚量、加入尾数を図4-6に示す。Mを基準値である0.25から0.1増減させた際に生じる資源量、親魚量、加入尾数の増減は約24~35%であったが、加入尾数に与えるMの不確実性の影響が他の指定値よりもやや大きい傾向がみられた。

年齢別漁獲係数(F)の推移を図4-7および補足表2-1に示す。F値は年変動があるとともに年齢によっても異なるが、全体的には2009~2010年に増加したのち、震災後に減少傾向となった。とくに1歳および2歳の若齢魚で震災後に低い傾向が続いている。

漁獲割合は2010年までは22~42%で推移していたが、2011年以降は震災の影響で減少し、2011~2024年は13~25%と低い水準で推移している(図4-8、表4-1)。

(4) 加入量当たり漁獲量(YPR)、加入量当たり親魚量(SPR)および現状の漁獲圧

選択率の影響を考慮して漁獲圧を比較するため、加入量あたり親魚量(SPR)を基準に、その漁獲圧がなかった場合との比較を行った。図4-9、表4-1に年ごとに漁獲が無かったと仮定した場合のSPRに対する、漁獲があった場合のSPRの割合(%SPR)の推移を示す。%SPRは漁獲圧が低いほど大きな値となる。震災以前の%SPRは12~30%で推移していたが、近年は増加傾向にあり、2024年は40%となった。

SBmsyを維持する漁獲圧(Fmsy)に対するYPRと%SPRの関係を図4-10に示す。このときFの選択率としては令和4年8月に開催された「管理基準値等に関する研究機関会議」においてFmsyの推定に用いた値(三澤ほか2022b)を用いた。また、年齢別平均体重および成熟割合についてもFmsy算出時の値を使用した。Fmsyは%SPRに換算すると34%に相当し、現状の漁獲圧(F2019-2023)、F30%SPRおよびFmaxを下回る。

(5) 再生産関係

親魚量(重量)と加入量(尾数)の関係(再生産関係)を図4-11に示す。上述の「管理基準値等に関する研究機関会議」において、本資源の再生産関係式にはホッカー・スティック型再生産関係が適用されている(三澤ほか2022b)。ここで、再生産関係式のパラメータ推定に使用するデータは令和4(2022)年度の資源評価(三澤ほか2022a)に基づく1998~2019年の親魚量と翌年(1999~2020年)の1歳魚時点の加入尾数とした。最適化法には最小乗法を用い、加入量残差の自己相関を考慮した。再生産関係式の各パラメータを補足表6-1に示す。

(6) 現在の環境下においてMSYを実現する水準

現在(1998年以降)の環境下における最大持続生産量MSY、MSYを実現する親魚量(SBmsy)、およびSBmsyを維持するF(Fmsy)について、上記の「管理基準値等に関する研究機関会議」で推定された値(三澤ほか2022b)を補足表6-2に示す。

(7) 資源の水準・動向および漁獲圧の水準

MSY を実現する親魚量 (SBmsy) と SBmsy を維持する漁獲圧 (Fmsy) を基準にした神戸プロットを図 4-12 に示す。また、2024 年の親魚量と漁獲圧の概要を補足表 6-3 に示した。本資源における 2024 年の親魚量は SBmsy を下回っており、SBmsy の 0.95 倍である。また、2024 年の漁獲圧は Fmsy を下回っており、Fmsy の 0.79 倍である。なお、神戸プロットに示した漁獲圧の比 (F/Fmsy) とは、各年の F の選択率の下で Fmsy の漁獲圧を与える F を %SPR 換算して求めた値と、各年の F 値との比である。親魚量の動向は、直近 5 年間 (2020~2024 年) の推移から横ばいと判断される。

5. 資源評価のまとめ

親魚量は 2013 年以降増加傾向にあり、最近 5 年間 (2020~2024 年) では横ばいと判断される。2016 年以降の親魚量は MSY を実現する親魚量 (SBmsy) に近い値で増減しており、2024 年は SBmsy を下回っている。また、本資源に対する漁獲圧は近年低下傾向であり、2023 年および 2024 年は SBmsy を維持する漁獲圧 (Fmsy) を下回っている。

6. その他

震災以前の 10 年間は比較的加入が安定しており、そのため資源量も安定していた。震災以降は加入が大きく増加し、とくに 2014~2016 年の加入尾数は非常に多かった。近年の加入は減少傾向となっているものの、2017~2021 年は震災以前より高い水準で推移していた (図 4-5)。また、近年、本資源は成長の鈍化とそれに伴い 1 歳魚が漁獲されにくい状況となっており (図 3-3)、不確実性は高いものの、2024 年の加入量は低い水準であると推定された。本資源は 1980 年代後半~1990 年代前半に非常に低い水準の資源状態を経験している。このような状態を避けるためにも、特に加入状況が悪いと認められた場合に若齢魚の漁獲を控え、親魚に成長するまで保護する等の方策が必要となる。

7. 引用文献

- 橋本良平 (1955) ヤナギムシガレイの年令に関する基礎的研究. 東北水研報, 4, 156-164.
- 五十嵐敏 (1980) ヤナギムシガレイの胃中にみられる底生動物について (短報). 福島水試研報, 6, 91-92.
- 五十嵐敏・島村信也 (2000) 福島県海域におけるヤナギムシガレイの食性. 福島水試研報, 9, 53-58.
- 三澤 遼・成松庸二・鈴木勇人・森川英祐・時岡 駿・金森由妃・富樫博幸・永尾次郎 (2022a) 令和 4 (2022) 年度ヤナギムシガレイ太平洋北部の資源評価. 我が国周辺水域の漁業資源評価, 水産研究・教育機構, 1-28. FRA-SA2022-RC06-03. https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2023/07/details_2022_69.pdf (last accessed 28 Jul. 2023)
- 三澤 遼・成松庸二・鈴木勇人・森川英祐・時岡 駿・金森由妃・富樫博幸・永尾次郎 (2022b) 令和 4 (2022) 年度ヤナギムシガレイ太平洋北部の管理基準値等に関する研究機関会議資料. 水産研究・教育機構, 1-40. FRA-SA2022-BRP06-01. https://www.fra.affrc.go.jp/shigen_hyoka/SCmeeting/2019-1/20220825/FRA-SA2022-BRP06-01.pdf (last accessed 28 Jul. 2023)

- 中坊徹次・土居内龍 (2013) ヤナギムシガレイ. 「日本産魚類検索 全種の同定 第3版」
中坊徹次編, 東海大学出版会, 1680.
- 中原民男 (1969) 山口県沖合大陸棚に分布する重要底魚類の漁業生物特性. 山口外海水試
研報, **11**, 1-70.
- Narimatsu, Y., A. Yamanobe and M. Takahashi (2007) Reproductive cycle, age and body size at
maturity and fecundity of female willowy flounder (*Tanakius kitaharai*). Fish. Sci., **73**, 55-62.
- 坂本一男 (1984) ヤナギムシガレイ. 「日本産魚類大図鑑 (解説)」益田 一・尼岡邦夫・
荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫編, 東海大学出版会, 東京, 339.
- 西海区水産研究所 (1957) ヤナギムシガレイ. 東海・黄海における底魚資源の研究, **4**, 50-55.
- 島村信也・五十嵐敏 (2000) 福島県沿岸で漁獲されたヤナギムシガレイについて. 福島水試
研報, **9**, 29-52.
- 田中昌一 (1960) 水産生物の Population Dynamics と漁業資源管理. 東海水研報, **28**, 1-200.
- Yabuki, K. (1989) Age determination of yanagimushigarei *Tanakius kitaharai* (Pleuronectidae) from
otoliths in the Sea of Japan off Kyoto Prefecture. Bull. Japan. Soc. Sci. Fish., **55**, 1331-1338.
- 柳下直己・大木 繁・山崎 淳 (2005) 若狭湾西部海域におけるヤナギムシガレイの年齢
と成長および年齢組成. 日水誌, **71**, 138-145.

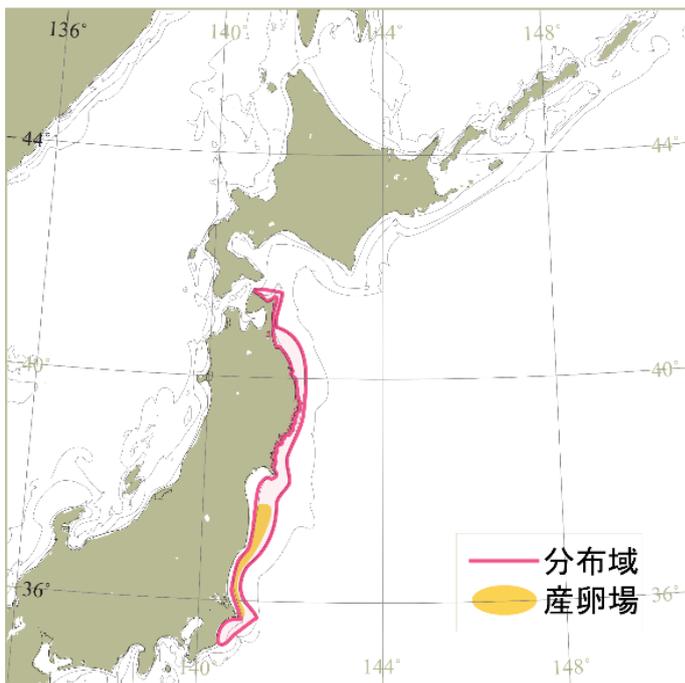


図 2-1. 太平洋北部におけるヤナギムシガレイの分布

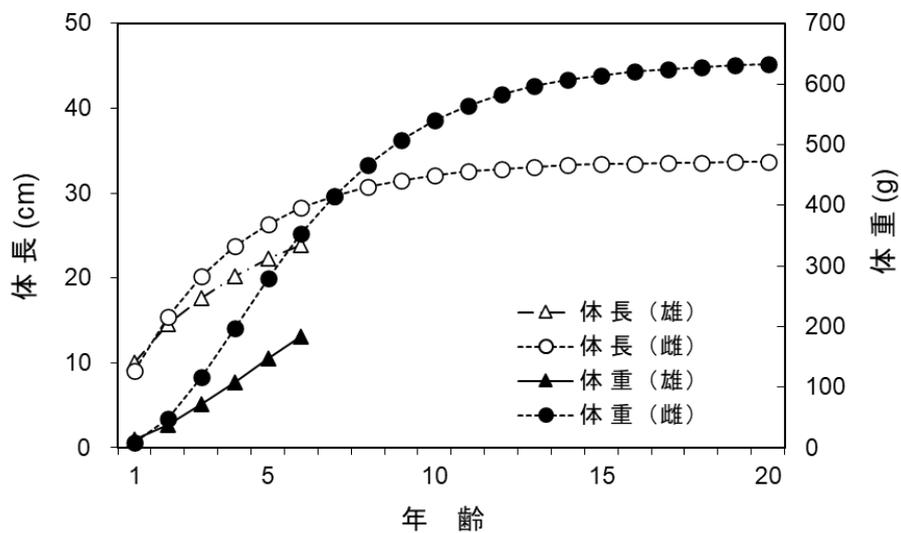


図 2-2. 年齢と成長

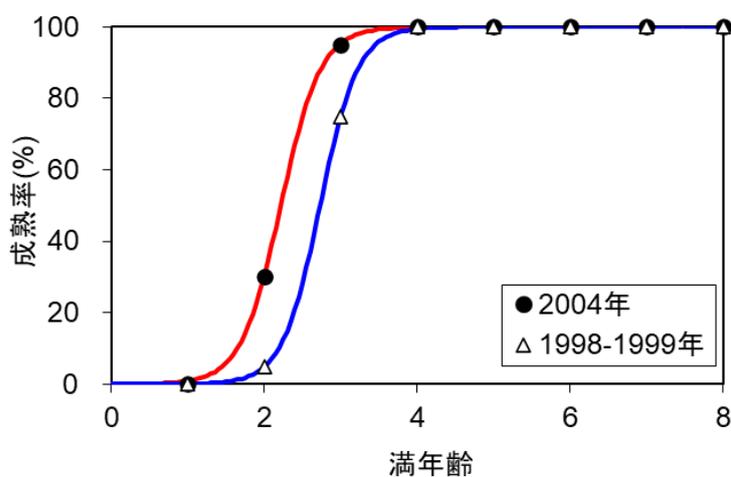


図 2-3. 年齢と成熟率の関係

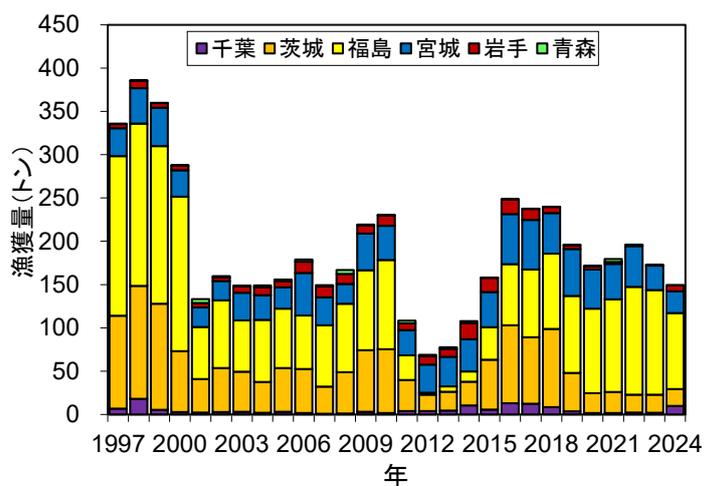
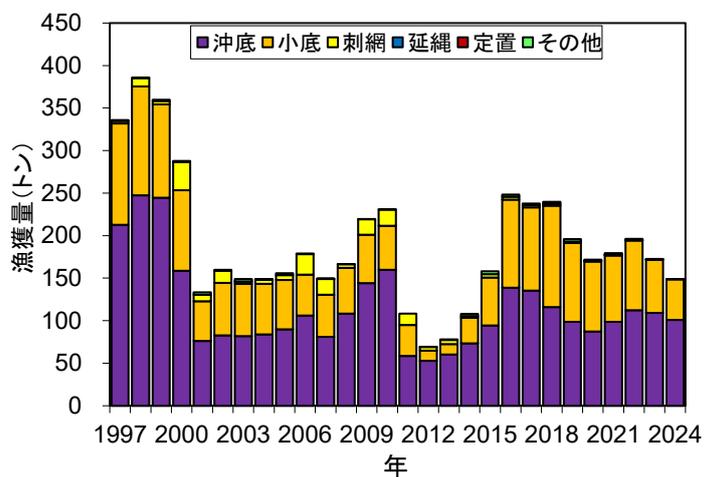


図 3-1. 漁業種別（上）および県別（下）漁獲量の推移 2024 年は暫定値。

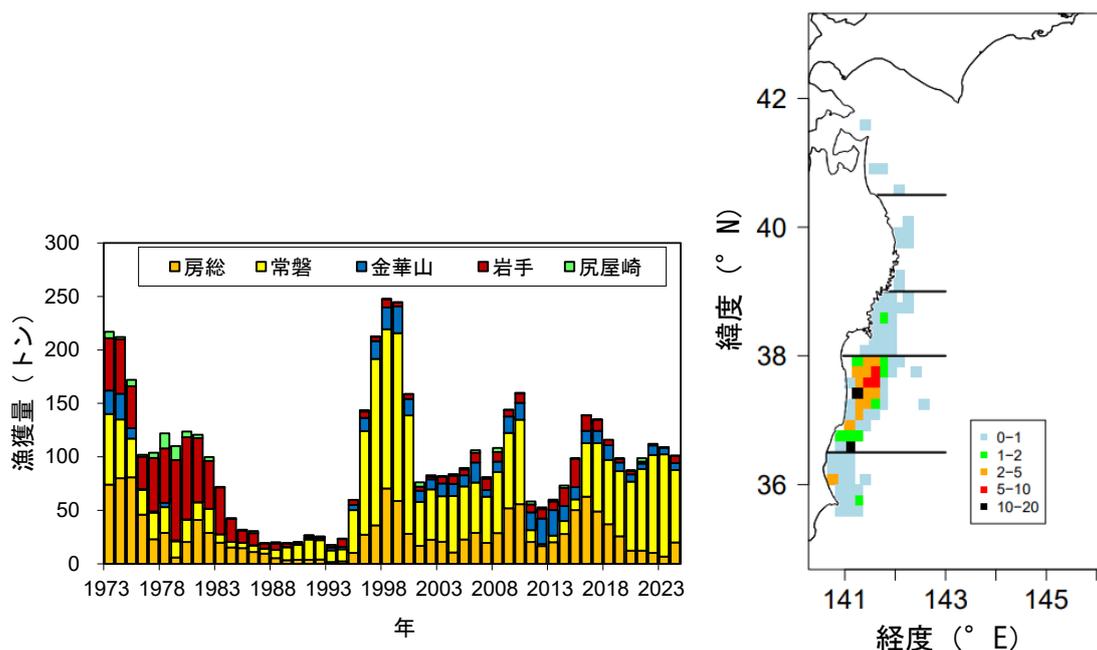


図 3-2. 沖底による漁獲量の推移 (左) および 2024 年の漁獲量 (トン) の分布 (右)
2024 年は暫定値。

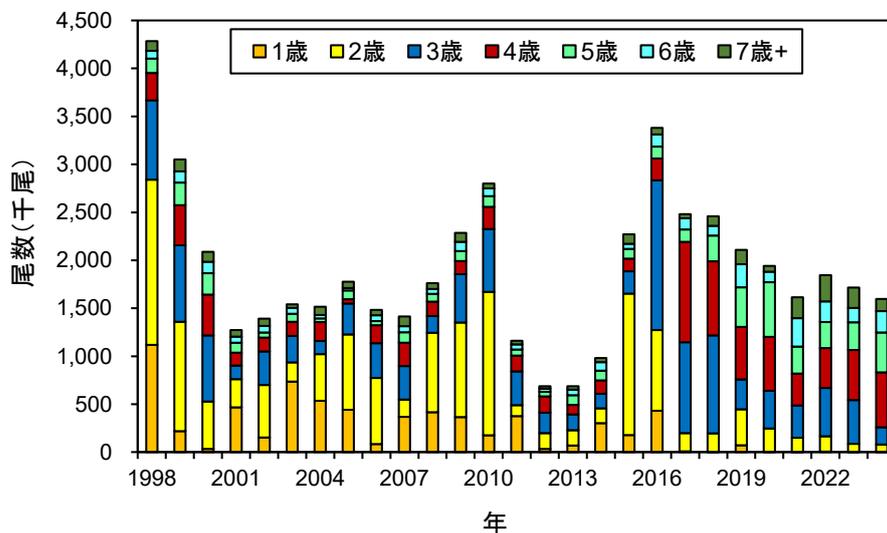


図 3-3. 年齢別漁獲尾数の推移

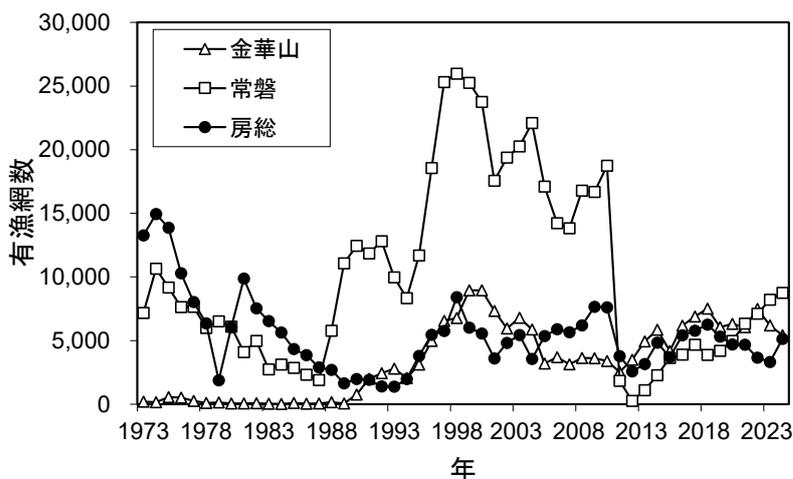


図 3-4. 沖底の海区別漁獲努力量の推移 2024 年は暫定値。

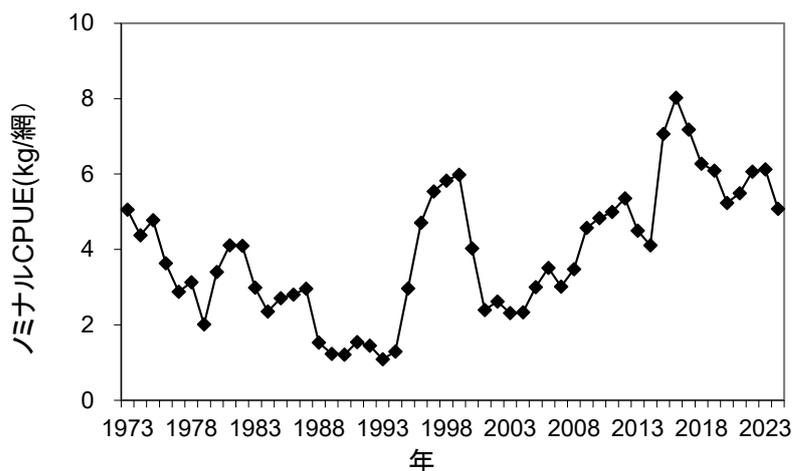
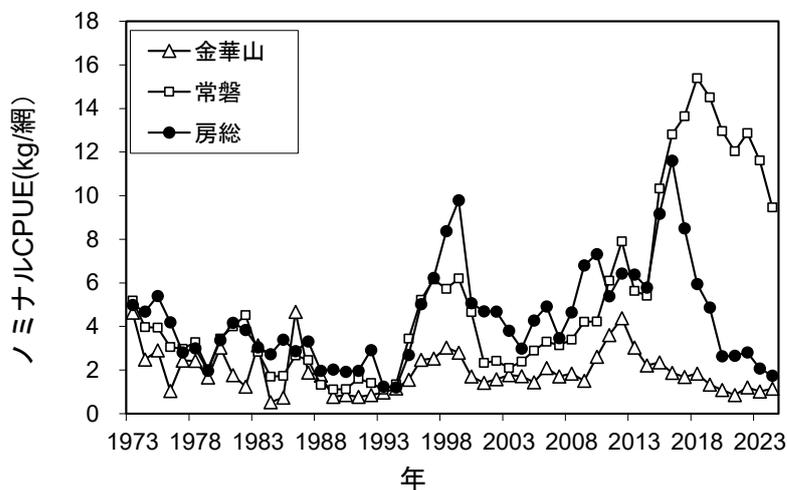


図 4-1. 金華山～房総海区における海区別（上）および 3 海区合算（下）の沖底ノミナル CPUE 2024 年は暫定値。

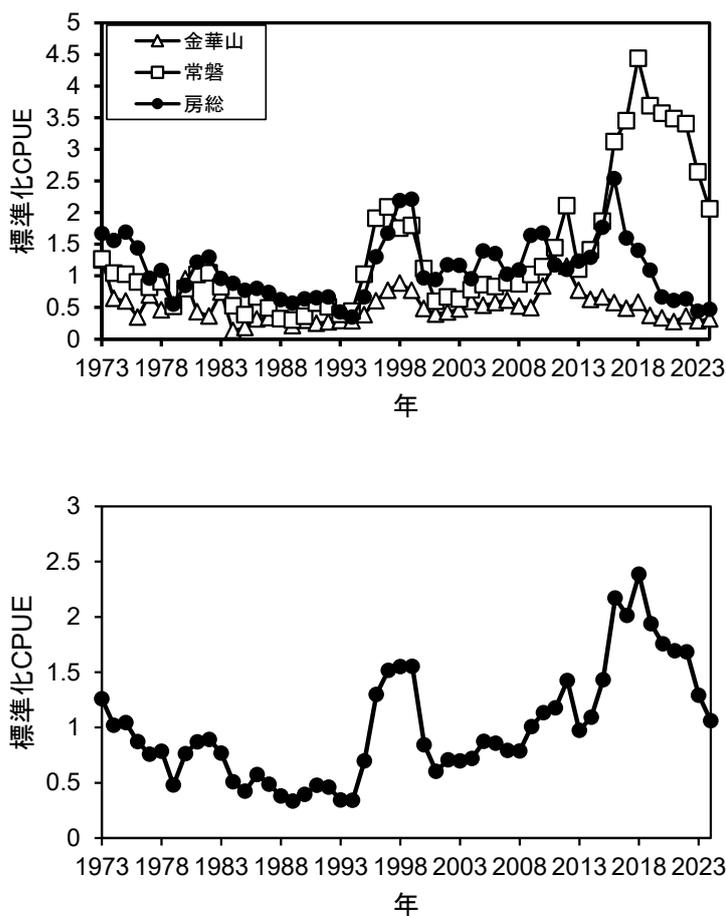


図 4-2. 金華山～房総海区の海区別（上）および3海区合算（下）の沖底標準化 CPUE それぞれ平均値で除すことで規格化した。

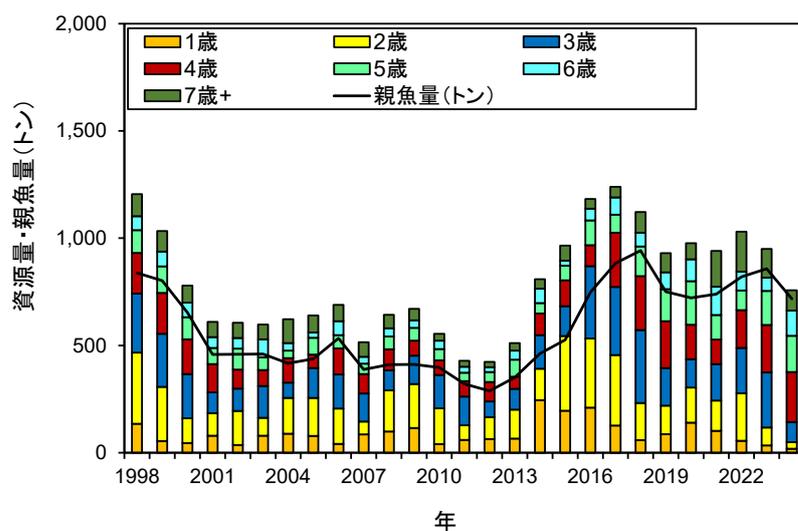


図 4-3. コホート解析によって求めた年齢別資源量および親魚量の推移

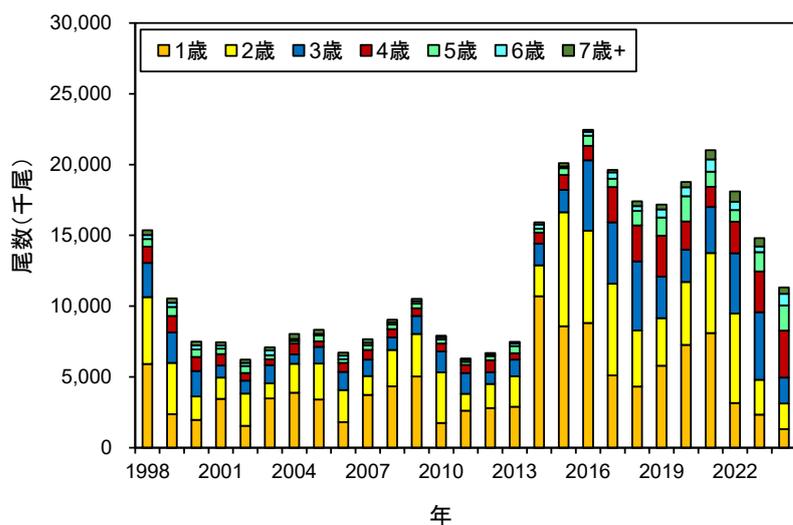


図 4-4. コホート解析によって求めた年齢別資源尾数の推移

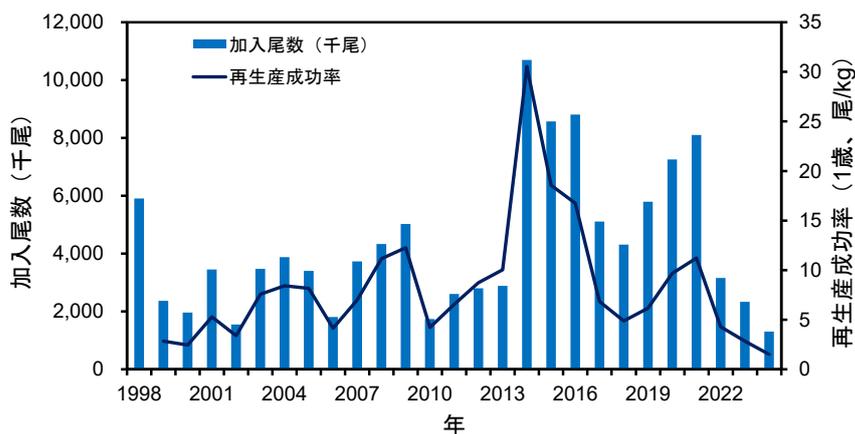


図 4-5. 1 歳魚の加入尾数および再生産成功率の推移

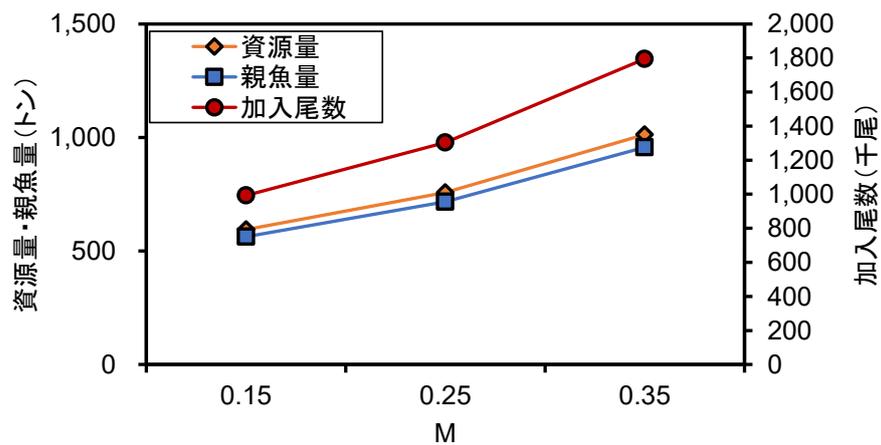


図 4-6. 自然死亡係数 (M) と 2024 年の資源量、親魚量、加入尾数の関係

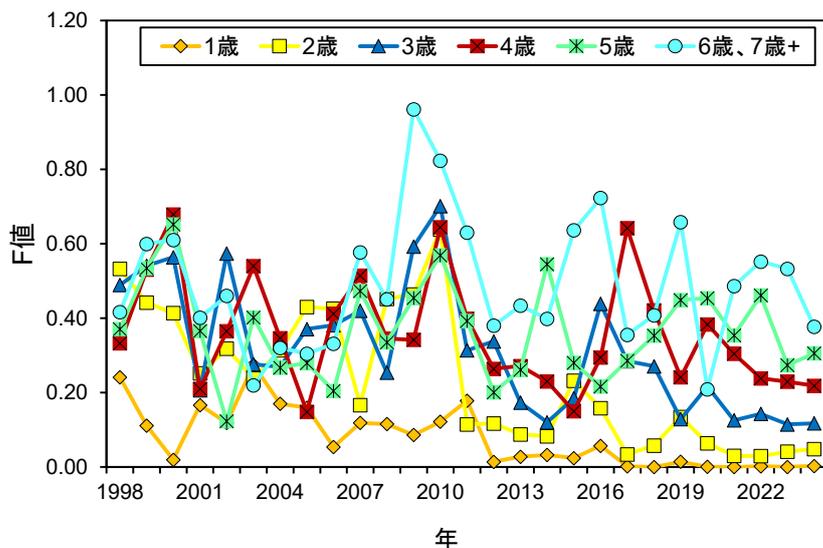


図 4-7. 年齢別漁獲係数 (F 値) の推移

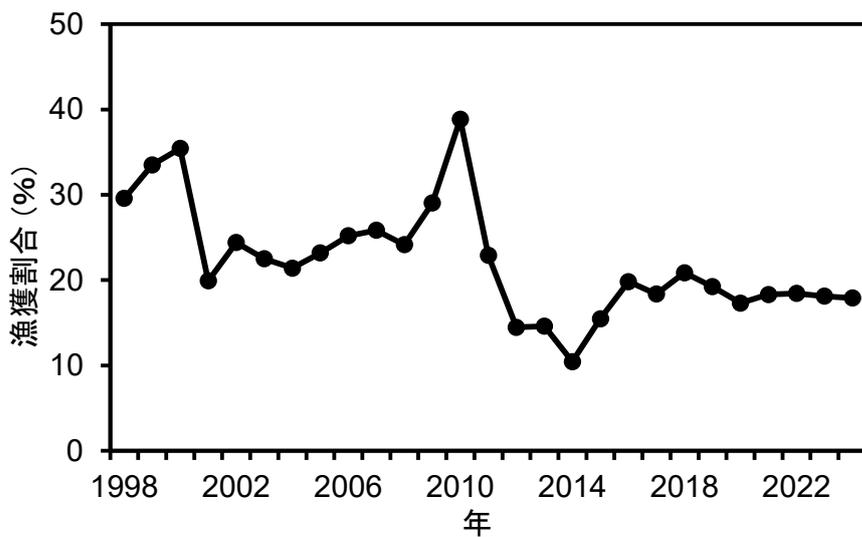


図 4-8. 漁獲割合の推移

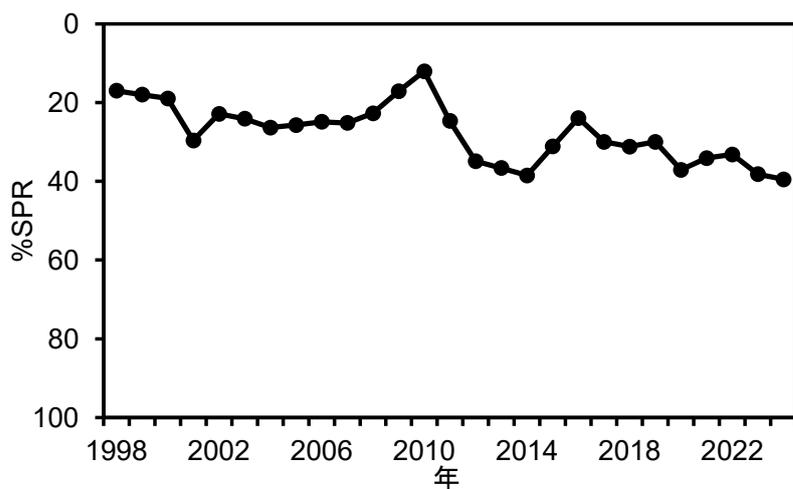


図 4-9. %SPR の推移 %SPR は漁獲がないときの親魚量に対する漁獲があるときの親魚量の割合を示し、F が高い（低い）と%SPR は小さく（大きく）なる。

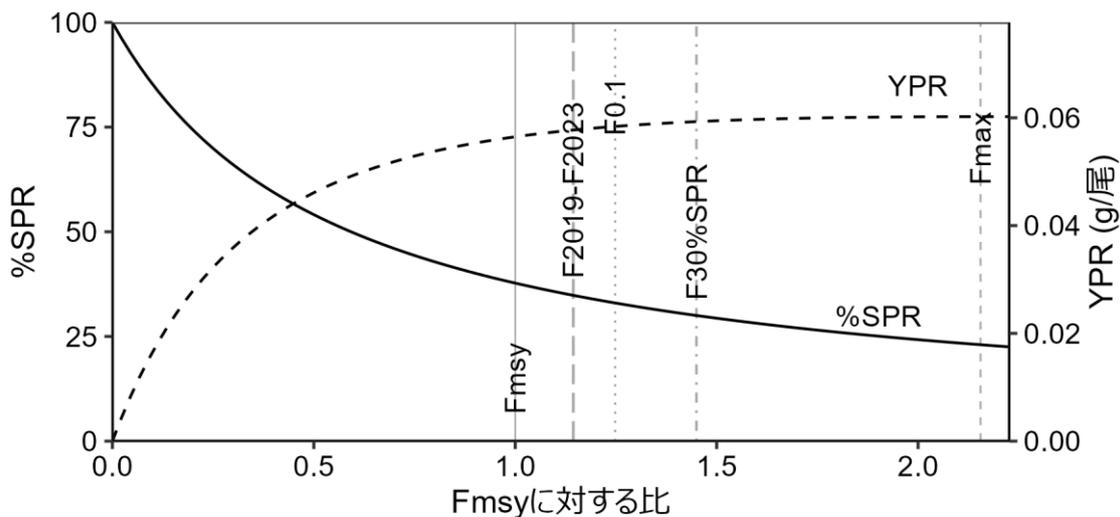


図 4-10. Fmsy に対する YPR と%SPR の関係

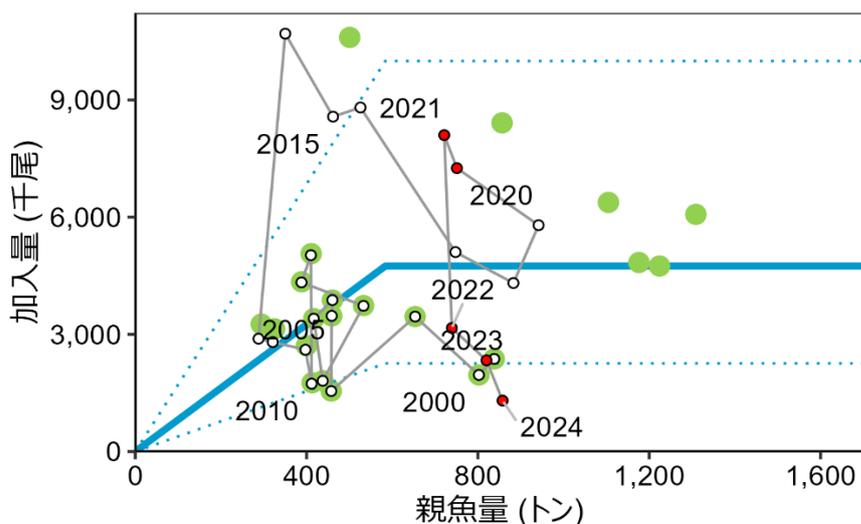


図 4-11. 親魚量と加入量（1 歳魚資源尾数）の関係（再生産関係）

緑色の丸および青線は令和 4 年 8 月に開催された「管理基準値等に関する研究機関会議」（三澤ほか 2022b）で提案された観測データと再生産関係式。点線は観測データの 90%が含まれると推定される範囲を示す。白色および赤色の丸は令和 7（2025）年度の資源評価における資源量と加入量の推定値である。

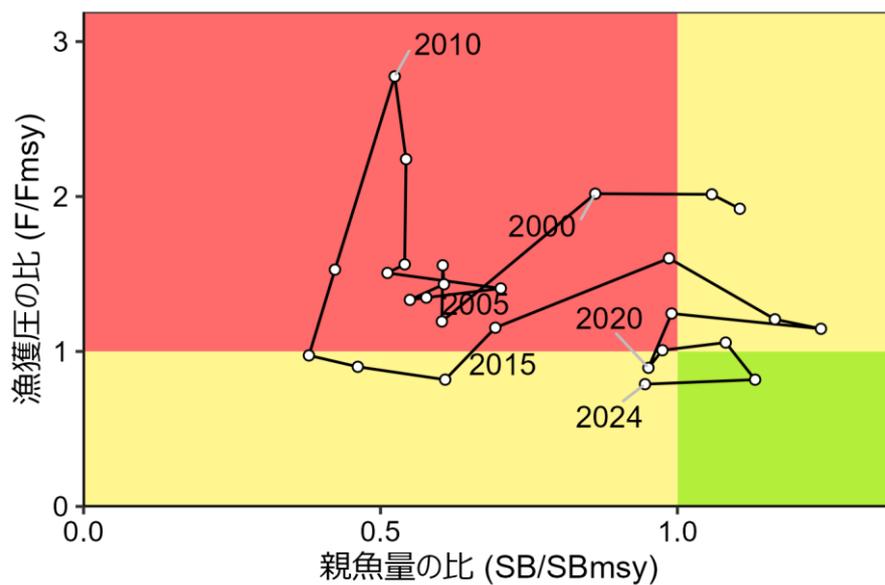


図 4-12. 最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）および SBmsy を維持する漁獲圧（Fmsy）に対する、親魚量および漁獲圧の関係（神戸プロット）

表 3-1. ヤナギムシガレイ太平洋北部における県別・漁業種類別の漁獲量（トン）の推移

県名	漁業種	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
青森	沖底	1	0	0	0	0	4	1	1	1	2	2	1	4	1	0
	小底	1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0
	刺網	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	延縄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岩手	沖底	-	4	8	4	4	4	2	6	8	5	9	11	9	6	9
	小底	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	刺網	-	1	1	1	1	1	1	0	1	1	3	2	3	4	3
	延縄	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	-	0	0	1	1	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0
宮城	沖底	12	17	21	25	15	10	9	12	11	11	19	6	10	15	16
	小底	13	15	20	19	14	9	9	17	16	10	11	11	12	13	9
	刺網	0	0	0	0	1	1	3	1	2	2	20	15	1	14	15
	延縄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	3	1	2	0	2	0	0	0	0	0
福島	沖底	97	156	149	157	111	41	47	43	53	49	47	43	57	70	79
	小底	15	27	30	22	36	13	21	16	16	17	14	26	22	21	23
	刺網	0	2	9	3	32	6	10	1	2	2	1	2	0	1	1
	延縄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
茨城	沖底	24	29	52	53	25	15	20	18	9	20	27	19	28	49	54
	小底	52	77	78	69	45	24	31	29	27	31	24	13	20	22	20
	刺網	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	延縄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
千葉	沖底	3	7	18	5	3	2	3	3	2	3	2	1	1	3	2
	小底	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	刺網	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	延縄	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計	沖底	144	213	247	245	159	76	83	82	84	90	106	81	108	144	160
	小底	-	119	128	110	95	46	62	61	59	58	48	49	54	57	52
	刺網	-	3	10	4	33	8	14	3	5	6	24	19	4	18	19
	延縄	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	-	1	0	1	1	3	1	3	1	2	1	1	0	0	0
計	-	336	386	360	288	133	160	149	149	156	179	149	167	219	231	

各県水試調べ。2023 年以前の沖底の小計は漁場別漁獲統計資料による。

2023 年以前の各県の沖底漁獲量は小海区別の漁獲量を適用（例：宮城=金華山海区、福島=常磐海区）。ただし、房総海区の漁獲量のうち千葉県船の漁獲は千葉県の漁獲量に含めた。2016～2018 年福島県の小底の漁獲量は、福島県の底びき網漁獲量の合計から沖底統計から求めた沖底の漁獲量を引いた値。

2024 年は暫定値。

表 3-1. (続き)

県名	漁業種	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
青森	沖底	3	2	2	2	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0
	小底	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	刺網	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	延縄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岩手	沖底	7	9	8	17	13	14	11	5	4	3	2	0	0	7
	小底	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	刺網	1	1	1	2	3	3	2	2	1	1	1	0	0	0
	延縄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
宮城	沖底	17	24	24	14	10	12	12	14	8	7	5	9	6	7
	小底	6	5	6	21	27	43	43	30	43	37	34	37	21	18
	刺網	6	3	4	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0
	延縄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	2	3	3	2	2	3	1	1	1	1	0
福島	沖底	11	2	6	12	38	50	64	60	61	64	76	91	95	68
	小底	11	0	0	0	0	20	14	27	28	33	31	33	25	20
	刺網	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	延縄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
茨城	沖底	17	13	16	18	28	50	37	29	22	11	11	8	5	10
	小底	19	6	6	10	29	40	40	62	22	12	13	12	16	9
	刺網	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	延縄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
千葉	沖底	4	4	4	10	5	13	12	8	4	2	2	2	2	10
	小底	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	刺網	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	延縄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計	沖底	58	53	60	73	94	139	135	116	99	87	99	112	109	101
	小底	37	12	12	30	56	104	98	119	93	82	78	82	63	48
	刺網	14	4	5	2	4	3	3	2	2	1	1	0	0	0
	延縄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	3	3	3	2	2	3	1	2	1	1	0
計		108	69	77	108	158	248	238	240	196	172	179	196	173	149

各県水試調べ。2023 年以前の沖底の小計は漁場別漁獲統計資料による。

2010 年の岩手、宮城はデータ消失のため、沖底以外の漁業は過去 5 年間の他県との漁獲量比から推定。

各県の沖底漁獲量は小海区別の漁獲量を適用（例：宮城=金華山海区、福島=常磐海区）。ただし、房総海区の漁獲量のうち千葉県船の漁獲は千葉県の漁獲量に含めた。

2016～2018 年福島県の小底の漁獲量は、福島県の底びき網漁獲量の合計から沖底統計から求めた沖底の漁獲量を引いた値。

2024 年は暫定値。

表 3-2. 金華山～房総海区の沖底におけるヤナギムシガレイの漁獲動向

年	漁獲量 (トン)	有漁網数	ノミナル CPUE	標準化 CPUE	年	漁獲量 (トン)	有漁網数	ノミナル CPUE	標準化 CPUE
1973	104	20,614	5.05	1.26	1999	241	40,217	5.98	1.55
1974	113	25,751	4.37	1.02	2000	154	38,250	4.03	0.84
1975	113	23,596	4.78	1.04	2001	68	28,487	2.40	0.60
1976	67	18,440	3.63	0.87	2002	79	30,147	2.62	0.71
1977	46	15,936	2.88	0.76	2003	75	32,457	2.32	0.70
1978	39	12,420	3.13	0.79	2004	74	31,523	2.33	0.72
1979	17	8,523	2.01	0.48	2005	77	25,656	3.00	0.87
1980	42	12,192	3.40	0.76	2006	84	23,821	3.51	0.86
1981	58	14,013	4.11	0.87	2007	68	22,602	3.02	0.79
1982	52	12,581	4.10	0.89	2008	92	26,594	3.48	0.79
1983	28	9,300	2.98	0.77	2009	128	27,932	4.58	1.01
1984	21	8,763	2.36	0.51	2010	144	29,738	4.83	1.13
1985	20	7,297	2.71	0.42	2011	41	8,150	4.99	1.18
1986	17	6,190	2.81	0.58	2012	34	6,330	5.35	1.42
1987	14	4,834	2.96	0.49	2013	41	9,196	4.50	0.97
1988	13	8,610	1.53	0.38	2014	53	12,962	4.11	1.09
1989	16	12,753	1.23	0.33	2015	81	11,494	7.07	1.43
1990	18	15,176	1.21	0.40	2016	124	15,488	8.03	2.17
1991	24	15,753	1.54	0.48	2017	124	17,326	7.18	2.01
1992	24	16,634	1.45	0.46	2018	111	17,641	6.27	2.39
1993	15	14,143	1.09	0.35	2019	95	15,541	6.09	1.94
1994	16	12,356	1.29	0.34	2020	84	15,986	5.24	1.76
1995	55	18,597	2.97	0.70	2021	94	17,049	5.49	1.69
1996	136	28,961	4.71	1.30	2022	111	18,254	6.06	1.68
1997	208	37,607	5.54	1.52	2023	109	17,737	6.13	1.29
1998	240	41,153	5.83	1.55	2024	98	19,276	5.08	1.06

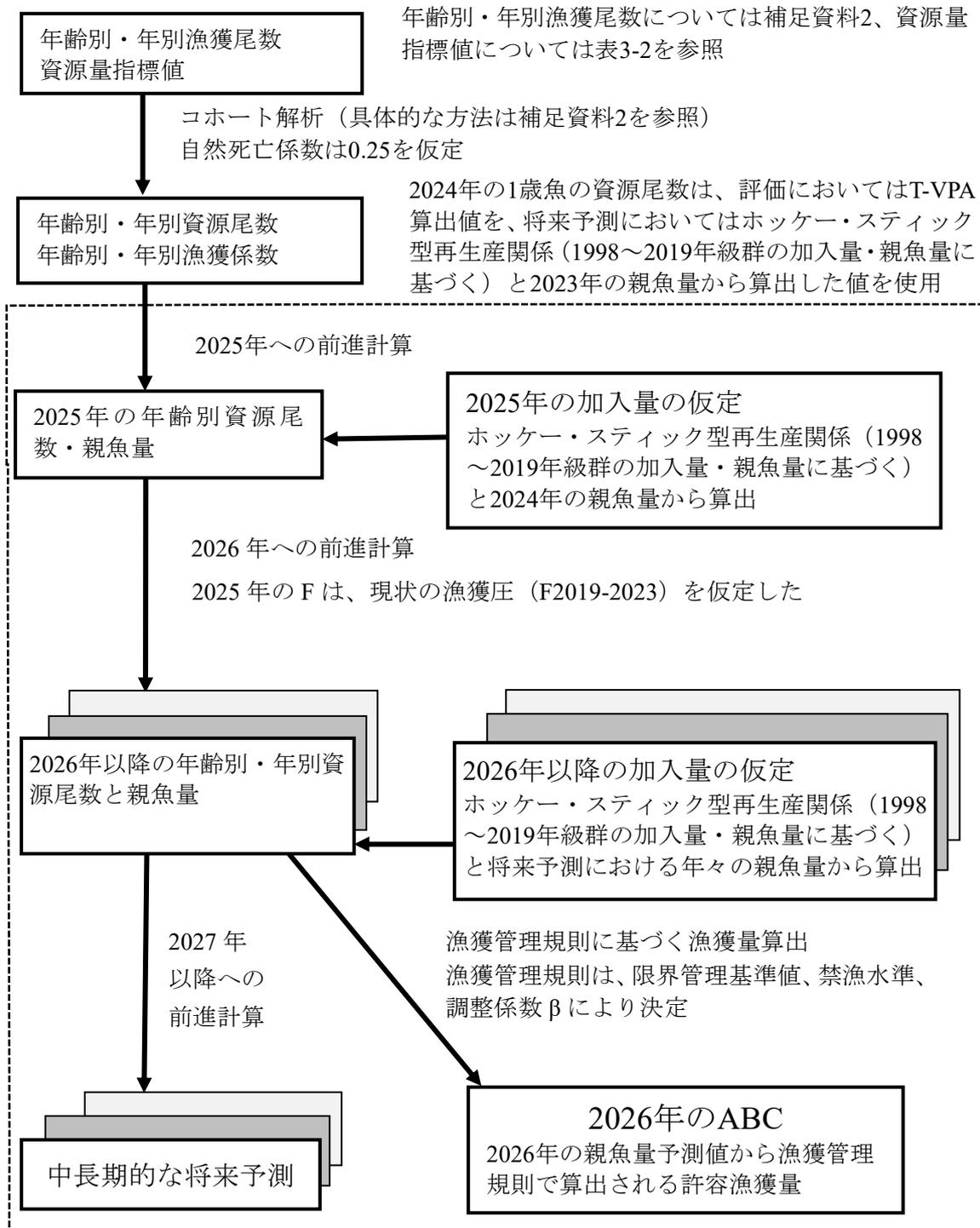
2024 年は暫定値。

標準化 CPUE は規格化した値（平均を 1 とした時の相対値）。

表 4-1. ヤナギムシガレイ太平洋北部の資源量解析結果

年	資源量 (トン)	漁獲量 (トン)	親魚量 (トン)	加入尾数 (千尾)	漁獲割合 (%)	再生産成功率 (尾/kg)	%SPR	F/Fmsy
1998	1,205	386	838	5,905	30		17	1.92
1999	1,034	360	802	2,371	34	2.83	18	2.01
2000	779	288	653	1,961	35	2.44	19	2.02
2001	610	133	458	3,455	20	5.29	30	1.19
2002	606	160	459	1,549	24	3.38	23	1.56
2003	598	149	460	3,473	22	7.57	24	1.43
2004	622	149	417	3,877	21	8.42	26	1.33
2005	640	156	438	3,402	23	8.16	26	1.35
2006	689	179	533	1,810	25	4.14	25	1.41
2007	516	149	388	3,729	26	7.00	25	1.51
2008	643	167	410	4,330	24	11.16	23	1.56
2009	671	219	412	5,027	29	12.26	17	2.24
2010	554	230	397	1,737	39	4.22	12	2.78
2011	428	108	321	2,606	23	6.56	25	1.53
2012	423	69	288	2,802	14	8.73	35	0.97
2013	510	78	350	2,888	15	10.04	37	0.90
2014	809	108	462	10,698	10	30.55	38	0.82
2015	966	158	526	8,573	15	18.56	31	1.15
2016	1,183	248	748	8,808	20	16.75	24	1.60
2017	1,239	238	883	5,106	18	6.83	30	1.21
2018	1,121	240	942	4,314	21	4.89	31	1.15
2019	930	196	751	5,794	19	6.15	30	1.25
2020	976	172	721	7,255	17	9.66	37	0.89
2021	940	179	739	8,101	18	11.23	34	1.01
2022	1,030	196	820	3,162	18	4.28	33	1.06
2023	950	173	858	2,334	18	2.85	38	0.82
2024	757	149	717	1,304	20	1.52	40	0.79

補足資料 1 資源評価の流れ



※ 点線枠内は資源管理方針に関する検討会における管理基準値や漁獲管理規則等の議論をふまえて作成される。

補足資料 2 資源計算方法

2002～2010年は福島県、2011～2015年、2017～2020年は茨城県、2016、2021～2024年は福島県と茨城県で漁獲されたヤナギムシガレイの精密測定結果と耳石の年齢査定結果から全長階級別の年齢組成を作成した。全長階級別年齢組成の作成は1～6月および7～12月の二期に分けて毎年行った。全長階級別の年齢組成と漁獲物全体の全長組成から年齢別漁獲尾数を求めた。ヤナギムシガレイの成長、体重および寿命には雌雄差があるため、雌雄別の全長階級別年齢組成を用いて年齢分解を行った。1998～2001年については2002～2010年すべてのサンプルから求めた上下半期別雌雄別の全長階級別年齢組成をもとに漁獲物の全長組成を分解した。なお、6歳以下、全長30cm未満の雌雄比は1:1とし、7歳以上、全長30cm以上はすべて雌とした。また、年級間で成長差があるため、毎年5～6月に採集された個体から、年別年齢別雌雄別の体重を求めた。本種は1歳の途中から漁獲され始めるため、計算は1歳以上を対象とし、7歳以上の個体は少ないため、7歳は8歳以上を含めたプラスグループとした。得られた年別年齢別漁獲尾数を用いて、以下に示すコホート解析により年別年齢別資源尾数（補足表 2-1）を推定した。なお、ヤナギムシガレイは20年以上生きることも報告されているが、2002～2008年に漁獲、年齢査定された約11,266個体のうち、11歳以上の個体は47個体と少なかった。そこで寿命を10年と仮定し、田内・田中の式（田中 1960）より自然死亡係数 M は $2.5/10=0.25$ で一定とした。また、年齢別成熟割合は前述のように1歳では0、2歳では0.3、3歳以上で1.0とした。

1. Pope の近似式を用いた資源尾数の計算（ステップ 1）

各年齢、各年における資源尾数 $N_{a,y}$ を、以下の Pope (1972) の近似式を用いて求めた。

$$N_{a,y} = N_{a+1,y+1} \exp(M) + C_{a,y} \exp(M/2) \quad (1)$$

ここで $N_{a,y}$ は y 年における a 歳魚の資源尾数、 $C_{a,y}$ は y 年における a 歳魚の漁獲尾数である。最近年（2024年）、最高齢（7歳、プラスグループ）および最高齢-1歳の資源尾数はそれぞれ以下の式で求めた。

$$N_{a,2024} = C_{a,2024} \exp(M/2) / (1 - \exp(-F_{a,2024})) \quad (2)$$

$$N_{7+,y} = C_{7+,y} / (C_{7+,y} + C_{6,y}) \times N_{7+,y+1} \times \exp(M) + C_{7+,y} \times \exp(M/2) \quad (3)$$

$$N_{6,y} = C_{6,y} / (C_{7+,y} + C_{6,y}) \times N_{7+,y+1} \times \exp(M) + C_{6,y} \times \exp(M/2) \quad (4)$$

ターミナル F を除く漁獲係数 F 値の計算は以下の (5) 式で求めた。

$$F_{a,y} = -\ln(1 - (C_{a,y} \exp(M/2) / N_{a,y})) \quad (5)$$

最高齢の F は最高齢-1歳の F と等しくなるように求めた。コホート解析における最近年である2024年の F は、まず1～6歳については2024年を除く近年5年間（2019～2023年）の F の平均値とした。最高齢（プラスグループ）の F については、最高齢-1歳と等しくなるように探索的に求めた。その後、ステップ2の方法によりさらに最近年の F を調

整した。

2. 最近年の F の調整 (ステップ 2)

チューニング指数とした年齢別の資源量指標値には、ヤナギムシガレイの主漁場である金華山～房総海区の標準化 CPUE (補足資料 7) を用いた。最近年 (2024 年) の各年齢の漁獲係数 F を以下のようにチューニングし、資源尾数および F を推定した。最近年の年齢別 F の比率 (選択率) には、チューニングをしないコホート解析 (ステップ 1) から推定された 2019～2023 年の平均値を用いた。平松 (2001) に基づき、(1) 式を最小化する最近年の F_t を探索的に求めた。

$$\sum(I_y - qB_y)^2 \quad (1)$$

また、 \hat{q} の推定値は以下の (2) 式で解析的に求めた。

$$\hat{q} = \frac{\sum_y I_y B_y}{\sum_y B_y^2} \quad (2)$$

ここで B は資源量、I には 1998～2024 年の沖底金華山～房総海区の標準化 CPUE を用いた。

「令和 7 (2025) 年度 資源評価におけるモデル診断の手順と診断結果の情報提供指針 (FRA-SA2025-ABCWG02-03)」に従って、本資源の評価に用いたコホート解析の統計学的妥当性や仮定に対する頑健性について診断した。

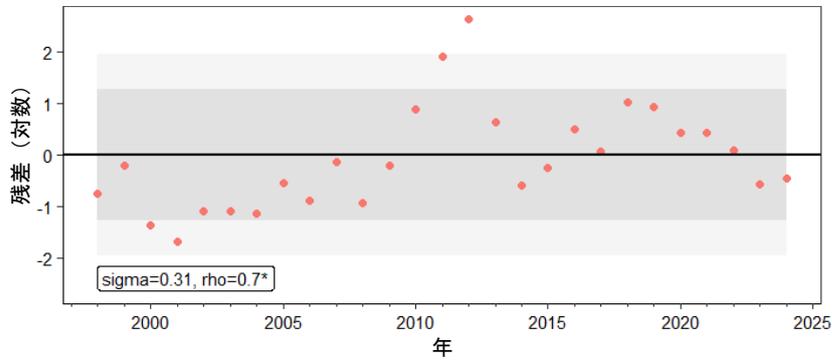
まず、指標値の観測値とモデルの予測値の残差については、震災直後に残差の変動幅が大きく、2009 年以前で残差の偏りもあったが、2013 年以降では変動幅は小さく、偏りもみられない (補足図 2-1)。次に、チューニングの有無によるコホート解析結果の違いを補足図 2-2 に示した。その結果、チューニングした場合はしなかった場合と比べて、資源量、親魚量、加入量のいずれの値もやや高く推定されていた。また、チューニングした場合について、データの追加・更新の影響を検証するレトロスペクティブ解析の結果を補足図 2-3 に示した。資源量は減少する傾向がみられたが、推定値の前年との差は小さかった。F 値はデータの更新により上昇する傾向があったが、推移は比較的安定していた。1 歳魚の加入尾数はデータの追加・更新によって大きく上方修正される年が複数みられ、先述のように、本資源ではコホート解析による最近年の加入尾数は過小評価している可能性が高いと判断される。

引用文献

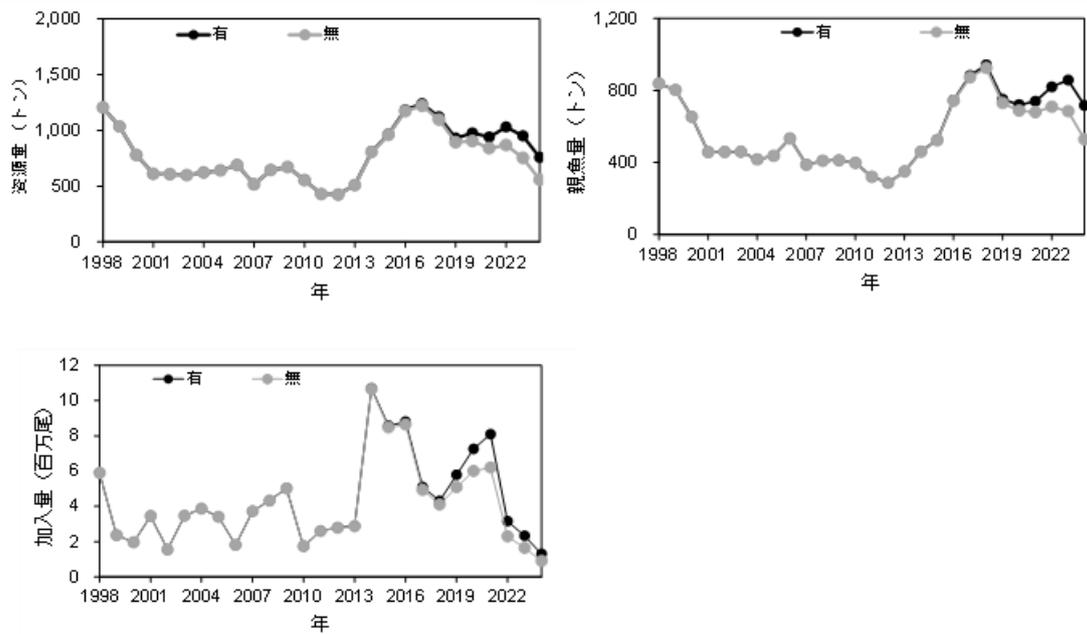
平松一彦 (2001) VPA. 平成 12 年度資源評価体制確立推進事業報告書 ー資源解析手法教科書ー, 日本水産資源保護協会, 104-128.

Pope, J. G (1972) An investigation of accuracy of virtual population analysis using cohort analysis. Res. Bull. int. comm. Northw. Atlant. Fish., 9, 65-74.

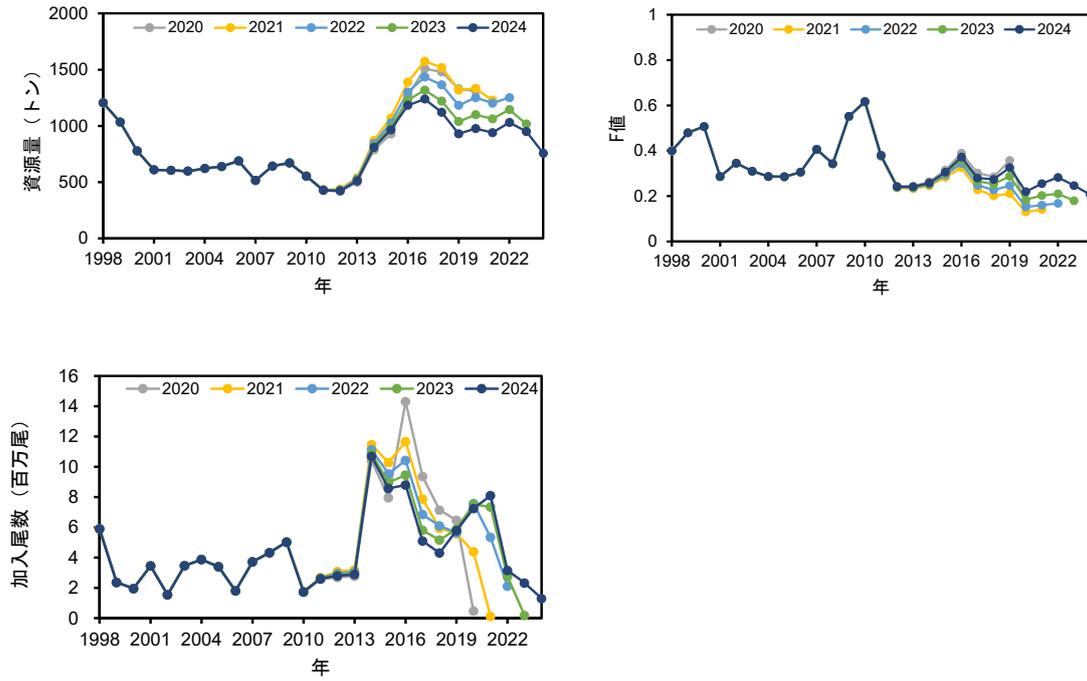
田中昌一 (1960) 水産生物の Population Dynamics と漁業資源管理. 東海水研報, 28, 1-200.



補足図 2-1. 資源量指標値の観測値とモデルの期待値の差を示す残差プロット



補足図 2-2. チューニングの有無によるコホート解析結果の比較
資源量 (左上)、親魚量 (右上)、加入量 (左下)



補足図 2-3. 資源量 (左上)、F 値 (右上) および加入尾数 (左下) のレトロスペクティブ解析結果

補足表 2-1. コホート解析に用いたデータ (1998~2024 年)

年齢別漁獲尾数 (千尾)

年齢	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
1	1,117	220	34	468	153	736	534	443	84	369
2	1,724	1,138	494	294	547	201	488	786	691	181
3	824	798	688	140	349	275	137	320	361	348
4	287	419	426	134	145	146	197	48	187	244
5	149	235	223	105	52	85	37	90	43	108
6	83	117	118	63	68	61	37	25	62	64
7以上	101	125	105	68	76	38	86	66	56	102
合計	4,286	3,052	2,089	1,272	1,391	1,542	1,516	1,777	1,484	1,416

年齢別平均体重(g)

年齢	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
1	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23
2	70	70	70	70	70	78	81	70	73	45
3	114	114	114	114	114	115	108	119	123	113
4	165	165	165	165	165	186	150	162	193	132
5	193	193	193	193	193	206	193	185	239	151
6	235	235	235	235	235	240	236	233	262	193
7以上	306	306	306	306	306	319	313	277	336	257

漁獲死亡係数(F)

年齢	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
1	0.24	0.11	0.02	0.17	0.12	0.28	0.17	0.16	0.05	0.12
2	0.53	0.44	0.41	0.25	0.32	0.24	0.31	0.43	0.43	0.17
3	0.49	0.54	0.56	0.21	0.57	0.28	0.27	0.37	0.38	0.42
4	0.33	0.53	0.68	0.21	0.37	0.54	0.35	0.15	0.41	0.51
5	0.37	0.53	0.65	0.37	0.12	0.40	0.27	0.28	0.20	0.47
6	0.42	0.60	0.61	0.40	0.46	0.22	0.32	0.31	0.33	0.58
7以上	0.42	0.60	0.61	0.40	0.46	0.22	0.32	0.31	0.33	0.58

年齢別資源尾数(千尾)

年齢	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
1	5,905	2,371	1,961	3,455	1,549	3,473	3,877	3,402	1,810	3,729
2	4,731	3,613	1,652	1,498	2,278	1,071	2,055	2,548	2,259	1,335
3	2,415	2,163	1,809	851	907	1,291	657	1,170	1,291	1,149
4	1,150	1,153	981	802	539	398	763	391	629	687
5	545	642	528	387	506	291	181	420	263	324
6	276	293	293	214	209	348	152	108	247	167
7以上	337	315	260	234	234	218	354	286	226	265
合計	15,359	10,550	7,484	7,441	6,221	7,090	8,038	8,324	6,724	7,657

年齢別資源量(トン)

年齢	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
1	135	54	45	79	35	79	89	78	41	85
2	331	253	116	105	160	83	167	177	164	60
3	276	247	206	97	103	148	71	139	159	130
4	190	190	162	132	89	74	114	63	121	91
5	105	124	102	75	98	60	35	78	63	49
6	65	69	69	50	49	83	36	25	65	32
7以上	103	96	80	72	72	70	111	79	76	68
合計	1,205	1,034	779	610	606	598	622	640	689	516

補足表 2-1. (続き)

年齢別漁獲尾数(千尾)

年齢	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
1	418	367	176	376	34	70	303	179	432	9
2	827	984	1,495	115	166	160	153	1,474	841	191
3	174	505	654	351	210	165	154	234	1,560	947
4	151	136	231	165	172	97	140	130	229	1,046
5	80	105	113	64	48	102	102	103	122	129
6	50	97	79	54	33	59	87	51	127	118
7以上	60	94	52	37	25	35	44	99	68	43
合計	1,762	2,286	2,800	1,162	689	687	982	2,270	3,379	2,482

年齢別平均体重(g)

年齢	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
1	23	23	23	23	23	23	23	23	24	25
2	74	68	46	57	60	62	67	43	49	51
3	106	103	106	90	88	83	102	89	68	73
4	166	132	123	126	107	122	131	113	97	101
5	187	185	178	178	159	159	178	143	162	143
6	244	194	247	210	186	223	222	193	195	181
7以上	334	314	302	306	273	306	292	295	306	304

漁獲死亡係数(F)

年齢	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
1	0.12	0.09	0.12	0.18	0.01	0.03	0.03	0.02	0.06	0.00
2	0.45	0.46	0.64	0.12	0.12	0.09	0.08	0.23	0.16	0.03
3	0.25	0.59	0.70	0.31	0.34	0.17	0.12	0.19	0.44	0.28
4	0.35	0.34	0.64	0.40	0.26	0.27	0.23	0.15	0.30	0.64
5	0.34	0.45	0.57	0.39	0.20	0.26	0.55	0.28	0.22	0.29
6	0.45	0.96	0.82	0.63	0.38	0.43	0.40	0.64	0.72	0.36
7以上	0.45	0.96	0.82	0.63	0.38	0.43	0.40	0.64	0.72	0.36

年齢別資源尾数(千尾)

年齢	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
1	4,330	5,027	1,737	2,606	2,802	2,888	10,698	8,573	8,808	5,106
2	2,579	3,004	3,591	1,198	1,698	2,152	2,188	8,064	6,518	6,478
3	881	1,279	1,471	1,477	832	1,176	1,535	1,568	4,980	4,334
4	588	532	550	568	841	462	770	1,060	1,015	2,501
5	320	324	294	225	297	503	274	477	711	589
6	157	178	160	130	118	189	302	124	281	446
7以上	189	172	104	90	91	112	152	237	149	162
合計	9,044	10,516	7,909	6,294	6,679	7,482	15,919	20,104	22,461	19,617

年齢別資源量(トン)

年齢	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
1	99	115	40	60	64	66	245	196	210	127
2	191	206	167	68	102	134	147	348	322	328
3	94	132	156	134	73	97	157	139	337	318
4	98	70	67	72	90	56	101	120	98	252
5	60	60	52	40	47	80	49	68	115	84
6	38	35	40	27	22	42	67	24	55	81
7以上	63	54	31	28	25	34	44	70	46	49
合計	643	671	554	428	423	510	809	966	1,183	1,239

補足表 2-1. (続き)

年齢別漁獲尾数 (千尾)

年齢	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
1	0	73	4	1	6	0	3
2	196	374	243	149	161	87	76
3	1,021	311	393	339	502	456	180
4	771	548	562	332	418	521	574
5	269	414	571	279	269	290	414
6	102	239	107	298	217	147	225
7以上	98	149	61	217	272	213	125
合計	2,458	2,108	1,941	1,615	1,844	1,716	1,597

年齢別平均体重(g)

年齢	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
1	14	15	19	13	18	15	14
2	44	39	37	25	35	34	17
3	70	60	57	52	50	54	51
4	99	75	81	80	79	77	70
5	134	115	114	109	112	116	95
6	186	138	158	150	151	155	145
7以上	291	257	205	260	256	229	209

漁獲死亡係数(F)

年齢	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
1	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
2	0.06	0.14	0.06	0.03	0.03	0.04	0.05
3	0.27	0.13	0.22	0.13	0.14	0.12	0.12
4	0.42	0.24	0.38	0.30	0.24	0.23	0.22
5	0.35	0.45	0.45	0.35	0.46	0.27	0.31
6	0.41	0.66	0.21	0.49	0.55	0.53	0.38
7以上	0.41	0.66	0.21	0.49	0.55	0.53	0.38

年齢別資源尾数(千尾)

年齢	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
1	4,314	5,794	7,255	8,101	3,162	2,334	1,304
2	3,969	3,359	4,448	5,646	6,308	2,457	1,818
3	4,877	2,918	2,287	3,250	4,266	4,770	1,837
4	2,540	2,897	1,998	1,434	2,232	2,880	3,313
5	1,025	1,298	1,773	1,060	824	1,370	1,783
6	345	561	645	877	580	405	811
7以上	332	351	368	640	726	586	453
合計	17,401	17,177	18,772	21,008	18,098	14,801	11,317

年齢別資源量(トン)

年齢	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
1	59	87	140	102	56	34	18
2	173	132	165	141	221	83	31
3	340	176	131	170	212	256	94
4	251	218	161	114	176	221	232
5	138	149	203	115	92	158	169
6	64	78	102	132	88	63	118
7以上	96	90	75	166	186	134	95
合計	1,121	930	976	940	1,030	950	757

補足資料 3 管理基準値案と禁漁水準案等

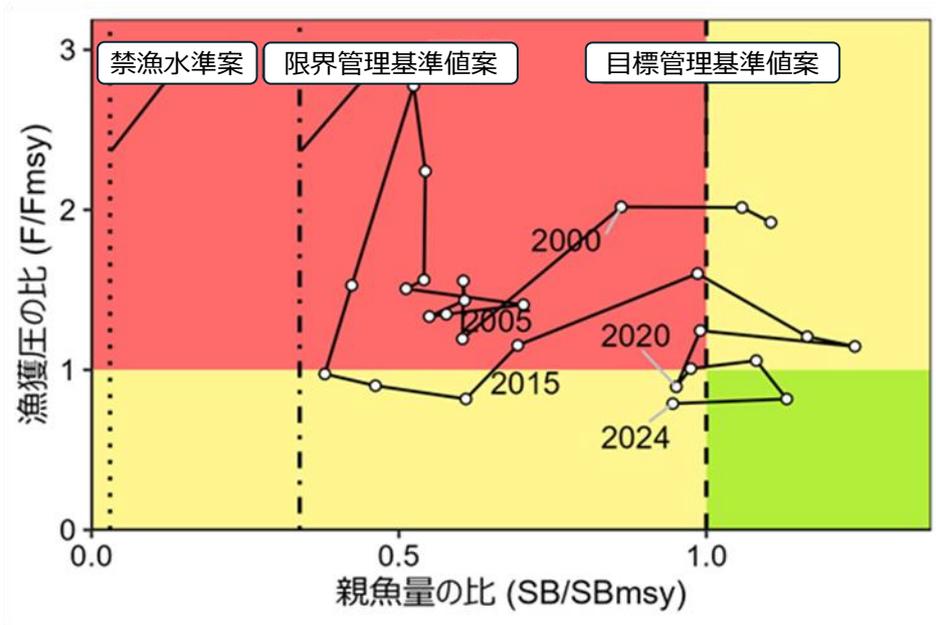
令和4年8月に開催された「管理基準値等に関する研究機関会議」により、目標管理基準値 (SBtarget) には MSY を実現する親魚量 (SBmsy : 758 トン)、限界管理基準値 (SBlimit) には MSY の 60% が得られる親魚量 (SB0.6msy : 257 トン)、禁漁水準 (SBban) には MSY の 10% が得られる親魚量 (SB0.1msy : 23 トン) を用いることが提案されている (三澤ほか 2022b、補足表 6-2)。

目標管理基準値案と、SBmsy を維持する漁獲圧 (F) を基準にした神戸プロットを補足図 3-1 に示す。コホート解析により得られた 2024 年の親魚量 (SB2024 : 717 トン) は目標管理基準値案を下回る。本資源における 2020 年以降の漁獲圧は、SBmsy を維持する漁獲圧と同等あるいは下回っていたと判断される (補足図 3-1、補足表 6-3)。

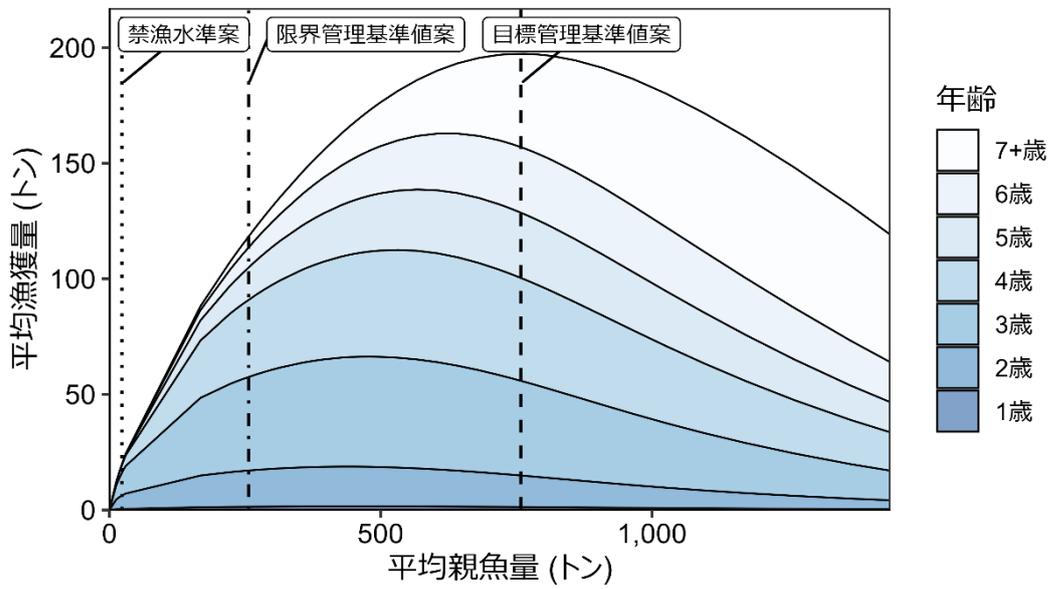
平衡状態における平均親魚量と年齢別平均漁獲量との関係を補足図 3-2 に示す。平均親魚量が限界管理基準値案以下では 2~4 歳魚が多く割合を占めている。しかし、親魚量が増加するにつれてより高齢魚の比率が高くなる傾向がみられる。

引用文献

三澤 遼・成松庸二・鈴木勇人・森川英祐・時岡 駿・金森由妃・富樫博幸・永尾次郎 (2022b) 令和4(2022)年度ヤナギムシガレイ太平洋北部の管理基準値等に関する研究機関会議資料. 水産研究・教育機構, 1-40. FRA-SA2022-BRP06-01. https://www.fra.affrc.go.jp/shigen_hyoka/SCmeeting/2019-1/20220825/FRA-SA2022-BRP06-01.pdf (last accessed 28 Jul. 2023)



補足図 3-1. 管理基準値案と親魚量・漁獲圧との関係 (神戸プロット)



補足図 3-2. 平衡状態における平均親魚量と年齢別平均漁獲量との関係 (漁獲量曲線)

補足資料 4 漁獲管理規則案に対応した将来予測

(1) 将来予測の設定

資源評価で推定した 2024 年の資源量から、コホート解析の前進法を用いて 2025～2056 年までの将来予測計算を行った（補足資料 5 参照）。将来予測における加入量は、各年の親魚量から予測される値を再生産関係式から与えた。加入量の不確実性として、対数正規分布に従う誤差を仮定し、5,000 回の繰り返し計算を行った。

近年、本資源は成長の鈍化に伴い 1 歳魚の多くが漁獲対象となっていないことが考えられ（図 3-3）、コホート解析による最近年（2024 年）の加入尾数は過小評価されている可能性が高いと判断される（補足図 2-2）。そのため将来予測においては、最近年の加入尾数は再生産関係式から予測された値（平均値 4,750 千尾）を外部から与えた（三澤ほか 2022b）。

本資源では資源尾数と体重の間に負の相関がある可能性が指摘されており、将来予測においては資源尾数の増減による年齢別体重の変化を考慮した（三澤ほか 2022b）。ただし、将来予測に用いられた各年齢別体重の最大・最小値はそれぞれ過去に観測された値の範囲内であることを確認した。

2025 年の漁獲量は、予測される資源量と現状の漁獲圧（F2019-2023）から仮定した。2026 年以降の漁獲圧には、各年に予測される親魚量をもとに下記の漁獲管理規則案で定められる漁獲圧を用いた。

(2) 漁獲管理規則案

漁獲管理規則案は、目標管理基準値案以上に親魚量を維持・回復する達成確率を勘案して、親魚量に対応した漁獲圧（F）等を定めたものである。「漁獲管理規則および ABC 算定のための基本指針」では、親魚量が限界管理基準値案を下回った場合には禁漁水準案まで直線的に漁獲圧を削減するとともに、親魚量が限界管理基準値案以上にある場合には F_{msy} に調整係数 β を乗じた値を漁獲圧の上限とするものを提示している。補足図 4-1 に本資源の「管理基準値等に関する研究機関会議」により提案された漁獲管理規則を示す。ここでは例として調整係数 β を 0.8 とした場合を示した。

(3) 2026 年の予測値

漁獲管理規則案に基づき試算された 2026 年の平均漁獲量は、 β を 0.8 とした場合には 184 トン（90%予測区間は 163～206 トン）、 β を 1.0 とした場合には 222 トン（90%予測区間は 197～249 トン）であった（補足表 6-4）。2026 年に予測される親魚量は目標管理基準値案を上回り、平均 815 トンと見込まれた。

(4) 2027 年以降の予測

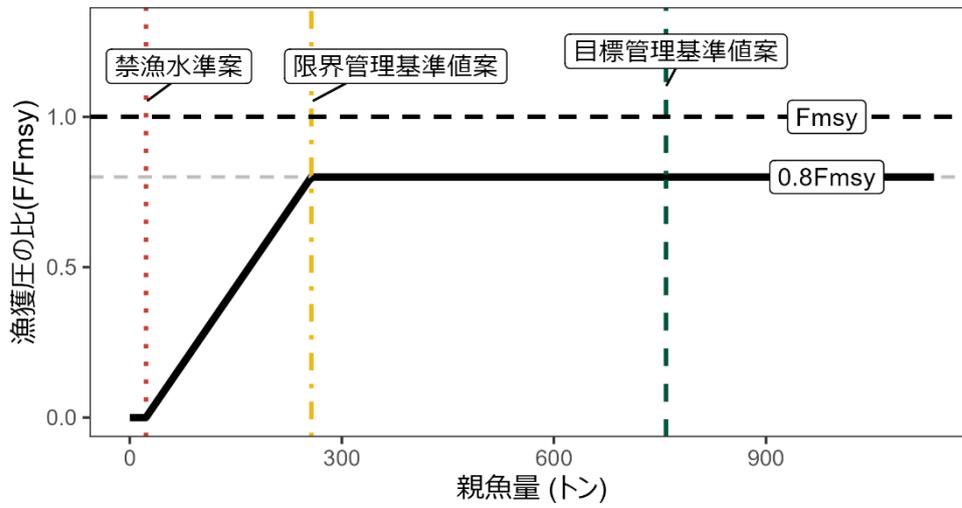
2027 年以降も含めた将来予測の結果を補足図 4-2 および補足表 4-1、4-2 に示す。漁獲管理規則案に基づく管理を 10 年間継続した場合、2036 年の親魚量の予測値は β を 0.8 とした場合には平均 795 トン（90%予測区間は 454～1,254 トン）であり、 β を 1.0 とした場合には平均 698 トン（90%予測区間は 379～1,122 トン）である（補足表 6-5）。親魚量予測値が目標管理基準値案を上回る確率は β が 0.8 以下で 50%を上回る。限界管理基準値案を上回る確率は β が 1.0 でも 50%を上回る。現状の漁獲圧（F2019-2023）を継続した場合の 2036

年の親魚量の予測値は平均 639 トン（90%予測区間は 334～1,040 トン）であり、目標管理基準値案を上回る確率は 26%、限界管理基準値案を上回る確率は 99%である。

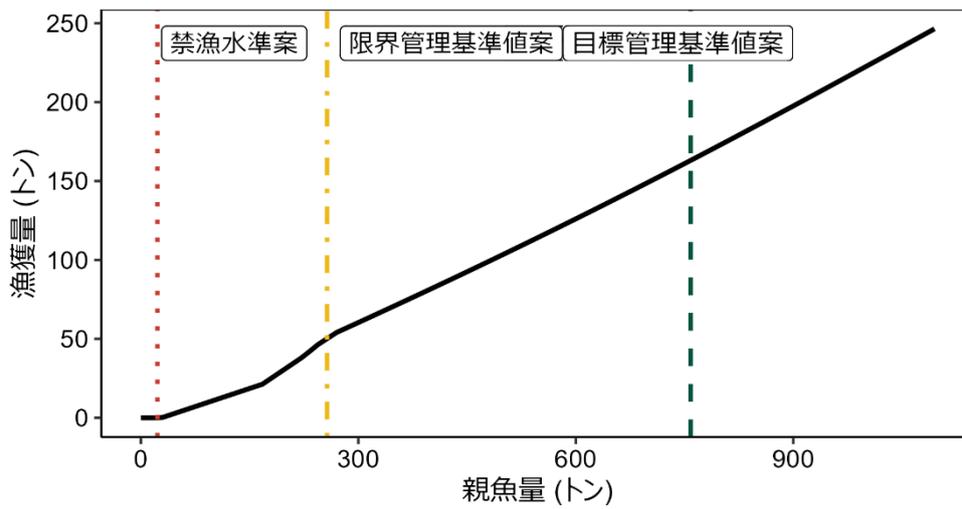
引用文献

三澤 遼・成松庸二・鈴木勇人・森川英祐・時岡 駿・金森由妃・富樫博幸・永尾次郎 (2022b) 令和 4 (2022) 年度ヤナギムシガレイ太平洋北部の管理基準値等に関する研究機関会議資料. 水産研究・教育機構, 1-40. FRA-SA2022-BRP06-01. https://www.fra.affrc.go.jp/shigen_hyoka/SCmeeting/2019-1/20220825/FRA-SA2022-BRP06-01.pdf (last accessed 28 Jul. 2023)

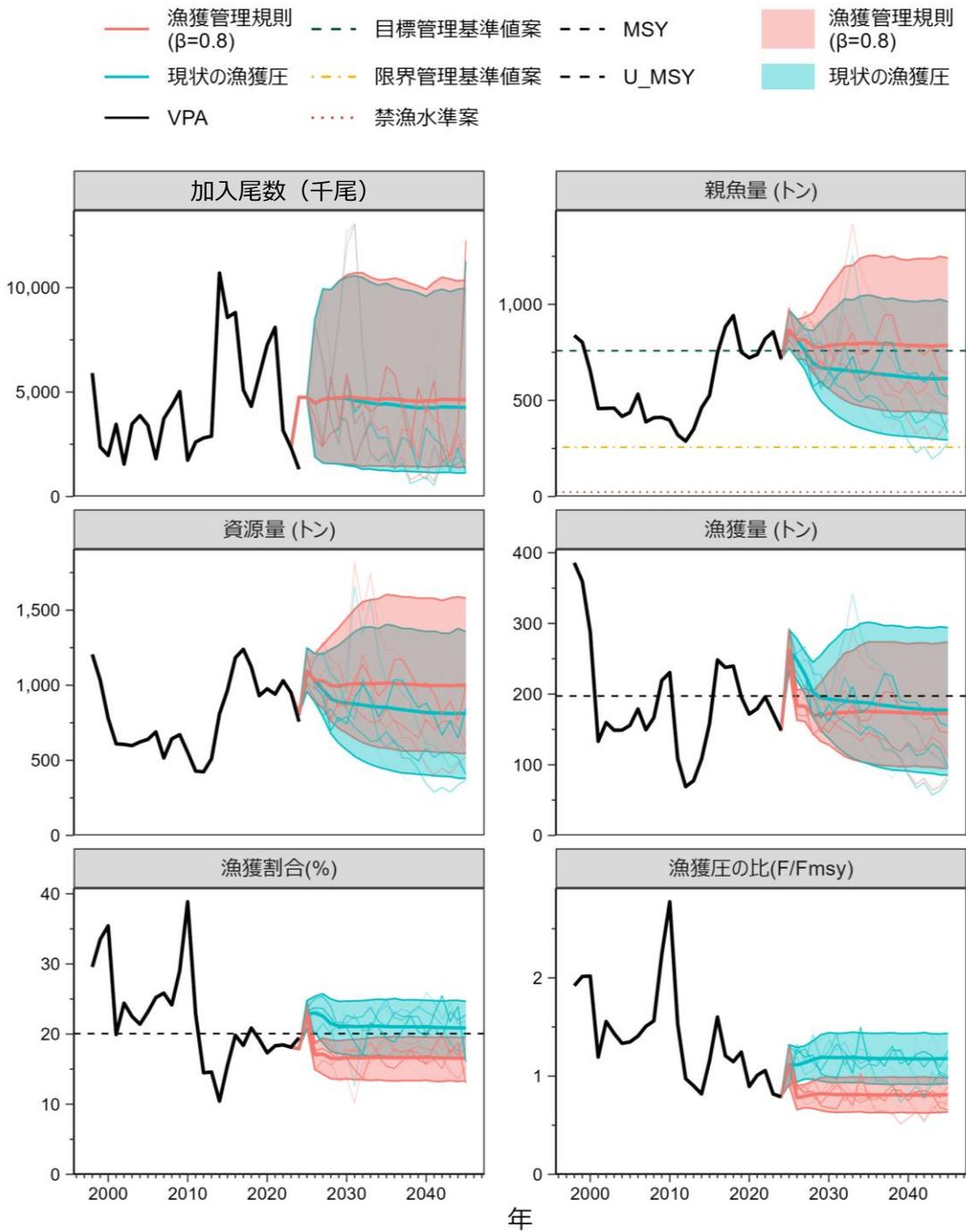
a) 縦軸を漁獲圧にした場合



b) 縦軸を漁獲量にした場合



補足図 4-1. 漁獲管理規則 (HCR) 案



補足図 4-2. 漁獲管理規則 (HCR) 案を用いた将来予測 (赤線) と現状の漁獲圧で漁獲を続けた場合の将来予測 (青線)

太実線は平均値、網掛けはシミュレーション結果の 90%が含まれる 90%予測区間、細線は 5 通りの将来予測の例示である。親魚量の図の緑破線は目標管理基準値案、黄一点鎖線は限界管理基準値案、赤点線は禁漁水準案を示す。漁獲量の図の破線は MSY、漁獲割合の図の破線は U_{msy} を示す。最近年 (2024 年) の加入尾数は再生産関係式から予測された値 (4,750 千尾) を外部から与えた。

補足表 4-1. 将来の親魚量が目標・限界管理基準値案を上回る確率

a) 目標管理基準値案を上回る確率 (%)

β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2046	2056	
1.0	97	82	62	32	30	33	33	34	34	34	35	35	33	32	
0.9			71	43	39	41	42	42	42	43	43	43	42	41	40
0.8			80	56	50	51	52	51	50	51	51	51	51	50	48
0.7			87	69	62	62	62	61	60	60	60	60	59	60	59
0.6			92	80	74	74	73	71	70	69	69	69	68	69	69
0.5			96	89	85	85	84	80	79	79	78	78	78	78	78
0.4			98	95	93	93	91	89	88	87	87	86	86	87	87
0.3			99	99	98	98	97	95	94	93	93	93	93	93	93
0.2			100	100	100	100	99	99	98	97	97	97	97	97	97
0.1			100	100	100	100	100	100	100	99	99	99	99	99	99
0.0			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
現状の漁獲圧			48	21	20	23	25	26	26	26	27	26	23	22	

b) 限界管理基準値案を上回る確率 (%)

β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2046	2056	
1.0	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	99	99	
0.9			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
0.8			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
0.7			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
0.6			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
0.5			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
0.4			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
0.3			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
0.2			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
0.1			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
0.0			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
現状の漁獲圧			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	97	97	

β を 0.0~1.0 で変更した場合の将来予測の結果を示す。2025 年の漁獲量は予測される資源量と現状の漁獲圧 (F2019-2023) から予測される 261 トンとし、2026 年から漁獲管理規則案による漁獲とした。比較のため現状の漁獲圧 (F2019-2023、 $\beta = 1.1$ に相当) で漁獲を続けた場合の結果も示した。

補足表 4-2. 将来の親魚量および漁獲量の平均値の推移

a) 親魚量の平均値の推移 (トン)

β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2046	2056		
1.0	867	815	782	728	711	711	709	709	705	706	704	698	680	672		
0.9			799	754	742	746	747	749	747	749	749	749	744	731	724	
0.8			816	781	775	785	789	794	793	797	798	798	795	786	780	
0.7			834	810	812	828	837	844	845	851	854	854	851	847	842	
0.6			852	840	851	876	890	900	904	912	917	917	915	916	911	
0.5			871	873	894	929	950	965	972	983	990	990	990	994	989	
0.4			890	907	940	988	1,017	1,039	1,051	1,066	1,075	1,077	1,081	1,087	1,082	
0.3			910	943	991	1,053	1,094	1,125	1,143	1,163	1,177	1,181	1,199	1,199	1,195	
0.2			931	982	1,045	1,126	1,182	1,224	1,252	1,280	1,299	1,308	1,338	1,338	1,335	
0.1			952	1,023	1,105	1,207	1,282	1,339	1,380	1,419	1,447	1,463	1,517	1,517	1,516	
0.0			974	1,067	1,171	1,298	1,396	1,474	1,533	1,587	1,629	1,655	1,754	1,754	1,758	
現状の漁獲圧					759	693	670	665	661	658	652	650	646	639	613	602

b) 漁獲量の平均値の推移 (トン)

β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2046	2056	
1.0	261	222	211	191	186	186	185	185	185	185	184	183	178	176	
0.9		203	198	182	178	180	180	180	180	181	181	180	176	174	
0.8		184	183	171	169	172	173	174	174	175	176	175	173	171	
0.7		163	167	158	159	163	165	166	167	168	169	168	167	166	
0.6		143	149	144	146	151	154	156	157	159	159	159	159	158	
0.5		121	129	127	131	137	141	143	145	146	148	148	148	148	
0.4		98	108	108	113	120	124	127	129	131	132	132	134	133	
0.3		75	84	86	91	98	103	106	108	110	112	112	114	114	
0.2		51	59	61	66	72	76	79	81	83	85	86	88	88	
0.1		26	31	33	36	40	43	45	46	48	49	50	52	52	
0.0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
現状の漁獲圧			248	228	203	194	193	191	191	189	189	188	185	177	174

β を 0.0~1.0 で変更した場合の将来予測の結果を示す。2025 年の漁獲量は予測される資源量と現状の漁獲圧 (F2019-2023) から予測される 261 トンとし、2026 年から漁獲管理規則案による漁獲とした。比較のため現状の漁獲圧 (F2019-2023、 $\beta = 1.1$ に相当) で漁獲を続けた場合の結果も示した。

補足資料 5 将来予測の方法

将来予測は、令和 4 年 8 月に開催された「管理基準値等に関する研究機関会議」において SBmsy を維持する F (Fmsy) の推定に用いた再生産関係 (三澤ほか 2022b) と、補足表 5-1 に示した各種設定 (自然死亡係数、成熟率、年齢別平均体重、現状の漁獲圧) を使用して実施した。なお、先述のように将来予測には資源尾数の増減による年齢別体重の変化 (補足図 5-1) を考慮して親魚量を計算した。また、最近年 (2024 年) および翌年の加入尾数は再生産関係式から予測された値を外部から与えた。資源尾数の予測には、コホート解析の前進法を用いた。

資源尾数や漁獲量の予測計算には、「令和 7 (2025) 年度 再生産関係の推定・管理基準値計算・将来予測シミュレーションに関する技術ノート (FRA-SA2025-ABCWG02-04)」に基づき、統計ソフトウェア R (version 4.5.1) および計算パッケージ frasyr (コミット番号: 25c4679) を用いた。

$$N_{a+1,y+1} = N_{a,y} \exp(-F_{a,y} - M) \quad (1 \sim 6 \text{ 歳魚}) \quad (1)$$

$$N_{7+,y+1} = (N_{7+,y} + N_{6,y}) \exp(-F_{6,y} - M) \quad (7 \text{ 歳以上}) \quad (2)$$

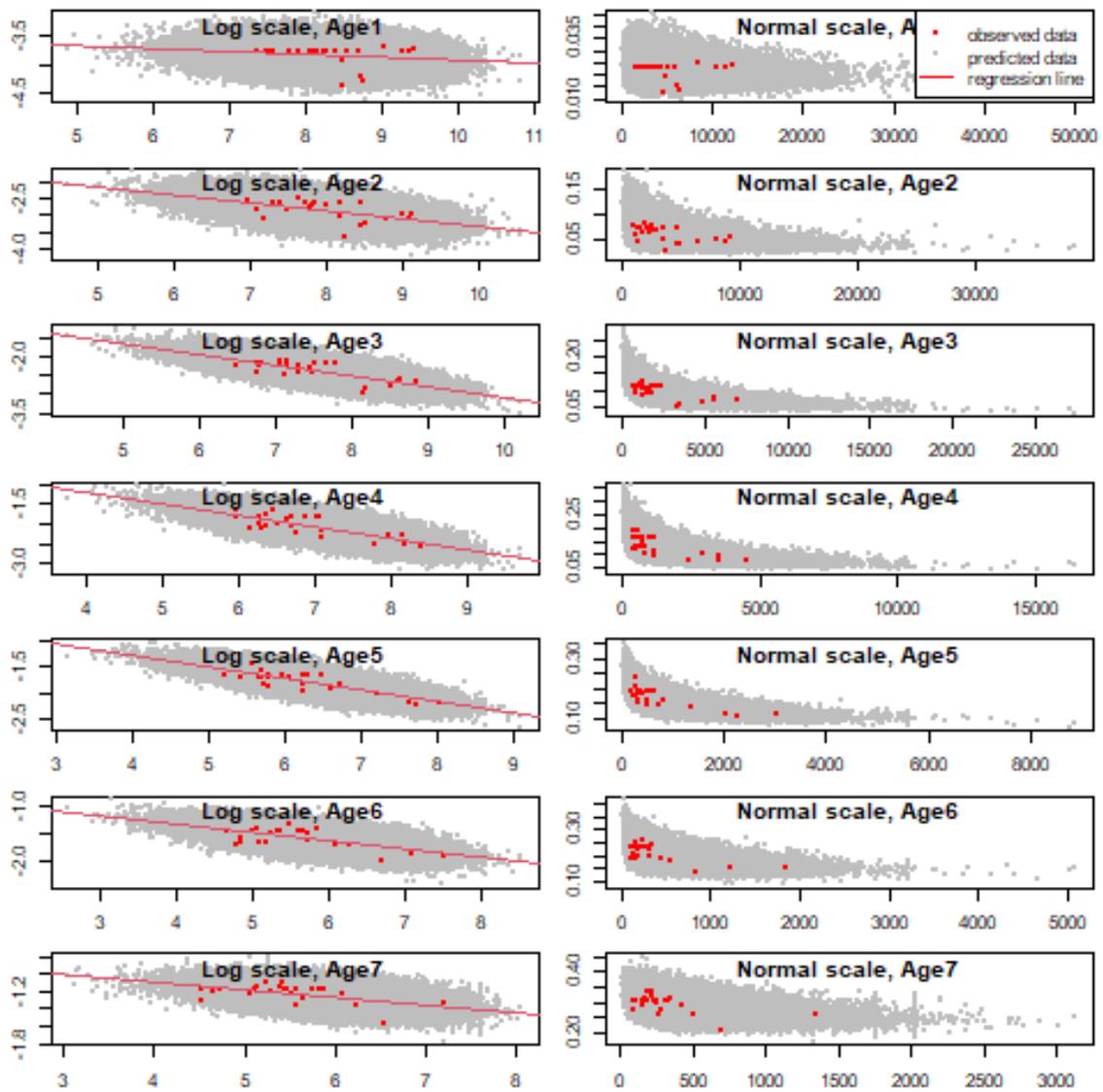
また、漁獲尾数は上記で求めた資源尾数と各漁獲シナリオから仮定される F 値をもとに以下の式から求めた。

$$C_{a,y} = N_{a,y} \{1 - \exp(-F_{a,y})\} \exp(-\frac{M}{2}) \quad (3)$$

将来予測における資源量および漁獲量は、ここで求めた資源尾数または漁獲尾数に補足表 5-1 の体重を乗じて求め、親魚量はこの資源量に成熟割合を乗じて算出した。

引用文献

三澤 遼・成松庸二・鈴木勇人・森川英祐・時岡 駿・金森由妃・富樫博幸・永尾次郎 (2022b) 令和 4 (2022) 年度ヤナギムシガレイ太平洋北部の管理基準値等に関する研究機関会議資料. 水産研究・教育機構, 1-40. FRA-SA2022-BRP06-01. https://www.fra.affrc.go.jp/shigen_hyoka/SCmeeting/2019-1/20220825/FRA-SA2022-BRP06-01.pdf (last accessed 28 Jul. 2023)



補足図 5-1. 年齢別資源尾数（横軸）と体重（縦軸）の関係（右は実測値、左は対数変換したもの）

赤点は1998～2020年における実際のデータ、赤線はその回帰、灰色は将来予測における推定値である。

補足表 5-1. 将来予測計算に用いたパラメータ

	選択率 (注 1)	Fmsy (注 2)	F2019-2023 (注 3)	平均体重 (g) (注 4)	自然死亡 係数	成熟 割合
1 歳	0.04	0.01	0.003	20.8(20.7~20.9)	0.25	0
2 歳	0.24	0.09	0.060	52.2(49.7~52.9)	0.25	0.3
3 歳	0.71	0.26	0.146	82.3(75.7~83.8)	0.25	1
4 歳	1.00	0.37	0.279	110.6(99.9~133.0)	0.25	1
5 歳	0.83	0.31	0.398	142.1(130.7~165.6)	0.25	1
6 歳	1.22	0.45	0.488	177.4(147.4~199.1)	0.25	1
7 歳以上	1.22	0.45	0.488	253.8(239.3~257.0)	0.25	1

注 1: 令和 4 年度研究機関会議で MSY を実現する水準の推定の際に使用した選択率 (すなわち、令和 4 年度資源評価での $F_{current}$ の選択率)。

注 2: 令和 4 年度研究機関会議で推定された Fmsy (すなわち、令和 4 年度資源評価での $F_{current}$ に $F_{msy}/F_{current}$ を掛けたもの)。

注 3: 本資源では 2019~2023 年の F の平均値を現状の漁獲圧としており、この F 値を 2024 年の漁獲量の仮定に使用した。

注 4: 将来の年齢別の体重は資源尾数に応じて変化するオプションを用いた。ここでは漁獲管理規則案の下で予測された 2026~2055 年の平均および最小・最大の体重を示す。

補足資料 6 各種パラメータと評価結果の概要

補足表 6-1. 再生産関係式のパラメータ

再生産関係式	最適化法	自己相関	a	b	S.D.	ρ
ホッケー・スティック型	最小二乗法	有	8.133	583.991	0.453	0.630

a と b は各再生産関係式の推定パラメータ、S.D.は加入量の標準偏差、 ρ は自己相関係数である。

補足表 6-2. 管理基準値案と MSY

項目	値	説明
SBtarget 案	758トン	目標管理基準値案。最大持続生産量 MSY を実現する親魚量(SBmsy)
SBlimit 案	257トン	限界管理基準値案。MSY の 60%の漁獲量が得られる親魚量(SB0.6msy)
SBban 案	23トン	禁漁水準案。MSY の 10%の漁獲量が得られる親魚量(SB0.1msy)
Fmsy	SBmsy を維持する漁獲圧 (1 歳, 2 歳, 3 歳, 4 歳, 5 歳, 6 歳, 7 歳以上) =(0.01, 0.09, 0.26, 0.37, 0.31, 0.45, 0.45)	
%SPR (Fmsy)	34%	Fmsy に対応する%SPR
MSY	197トン	最大持続生産量 MSY

補足表 6-3. 最新年の親魚量と漁獲圧

項目	値	説明
SB2024	717トン	2024 年の親魚量
F2024	2024 年の漁獲圧(漁獲係数 F) (1 歳, 2 歳, 3 歳, 4 歳, 5 歳, 6 歳以上) =(0.003, 0.06, 0.15, 0.28, 0.40, 0.49, 0.49)	
U2024	18%	2024 年の漁獲割合
%SPR (F2024)	40%	2024 年の%SPR
%SPR (F2019-2023)	35%	現状(2019~2023 年)の漁獲圧に対応する%SPR*
管理基準値案との比較		
SB2024/ SBmsy (SBtarget)	0.95	最大持続生産量を実現する親魚量(目標管理基準値案)に対する 2024 年の親魚量の比
F2024/ Fmsy	0.79	SBtarget を維持する漁獲圧(Fmsy)に対する 2024 年の漁獲圧の比*
親魚量の水準	MSY を実現する水準を下回る	
漁獲圧の水準	SBmsy を維持する水準を下回る	
親魚量の動向	横ばい	

* 2024 年の選択率の下で Fmsy の漁獲圧を与える F を%SPR 換算して算出し求めた比率。

補足表 6-4. 予測漁獲量と予測親魚量

2026年の親魚量(予測平均値):815トン				
項目	2026年の 漁獲量 予測平均値 (トン)	90% 予測区間 (トン)	現状の漁獲圧に 対する比 (F/F2019-2023)	2026年の 漁獲割合(%)
$\beta=1.0$	222	197-249	0.97	21
$\beta=0.9$	203	180-228	0.88	20
$\beta=0.8$	184	163-206	0.78	18
$\beta=0.7$	163	145-183	0.68	16
$\beta=0.6$	143	127-160	0.58	14
$\beta=0.4$	98	88-110	0.39	10
$\beta=0.2$	51	45-57	0.19	5
$\beta=0.0$	0	0-0	0	0
F2019-2023	248	220-278	1.11	24

補足表 6-5. 異なる β を用いた将来予測結果

考慮している不確実性:加入量					
項目	2036年の親魚量 予測平均値 (トン)	90% 予測区間 (トン)	2036年に親魚量が以下の 管理基準値を上回る確率(%)		
			SBtarget 案	SBlimit 案	SBban 案
$\beta=1.0$	698	379-1,122	35	100	100
$\beta=0.9$	744	415-1,188	42	100	100
$\beta=0.8$	795	454-1,254	51	100	100
$\beta=0.7$	851	496-1,329	59	100	100
$\beta=0.6$	915	542-1,422	68	100	100
$\beta=0.4$	1,077	650-1,655	86	100	100
$\beta=0.2$	1,308	806-1,989	97	100	100
$\beta=0.0$	1,655	1,039-2,477	100	100	100
F2019-2023	639	334-1,040	26	99	100

補足資料7 チューニングに用いた標準化 CPUE

年、月および海域の影響を除去するため、GLM（一般化線形モデル）を用いてヤナギムシガレイの主要な漁場である金華山～房総海区の CPUE の標準化を行った。分析には 1973 年以降の太平洋北区沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計資料のデータより抽出した、本種の有漁網データを用いた。自然対数を取った本種の CPUE を応答変数として採用し、モデルの誤差は正規分布に従うと仮定した。説明変数には、年 (Year)、季節 (Season)、海区 (Area) とそれらの 1 次の交互作用を用い、以下の初期モデルを作成した。

$$\text{Ln}(\text{CPUE}) = \text{Intercept} + \text{Year} + \text{Season} + \text{Area} + \text{Year} * \text{Season} + \text{Year} * \text{Area} + \text{Season} * \text{Area}$$

ここでの記号は次の通りである。

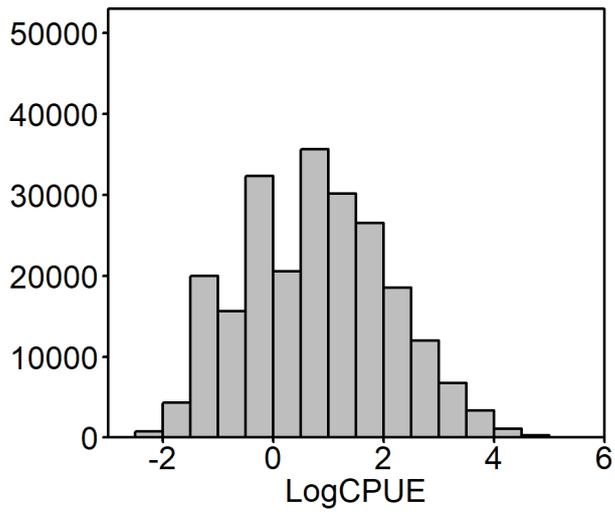
Year: 年 (1973～2024)

Season: 季節 (1～3 月、4～6 月、9 月、10～12 月)

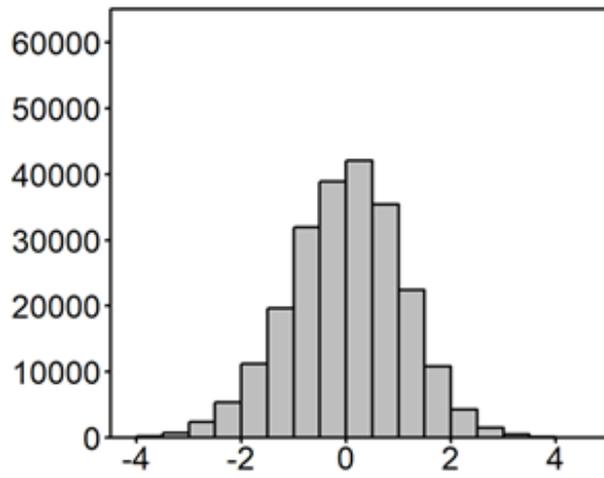
Area: 小海区 (金華山、常磐、房総)

説明変数は全てカテゴリカル変数として扱った。季節 (Season) はデータ欠損が生じないように 1～3 か月ごとにまとめた。変数総当たり法により BIC が最小となるモデルをベストモデルとして選択した。変数選択には R の MuMIn パッケージを用いた。モデル選択の結果、上記の初期モデルがベストモデルとして選択された。ベストモデルより最小二乗平均 (LSMEAN) を用いて海区别的年トレンドを算出し、それらを各海区の面積により重み付け平均することで標準化 CPUE の年トレンドとし、コホート解析のチューニング指数とした。

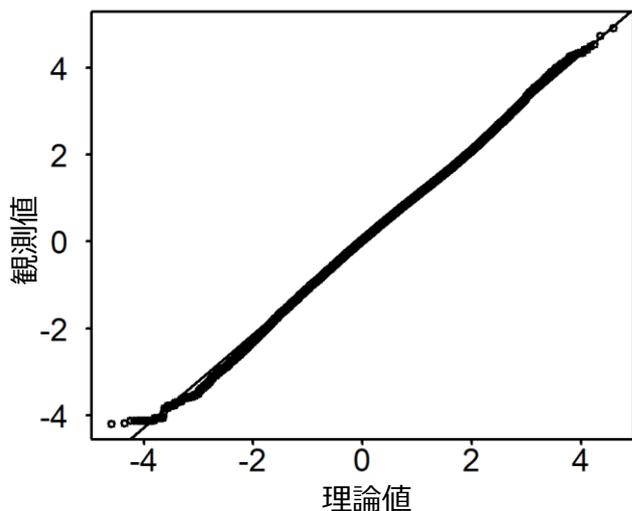
操業ごとの対数 CPUE およびモデルの予測値と実測値の残差は概ね正規分布に従っていた (補足図 7-1、7-2)。正規確率図では、大きな逸脱は観察されなかった (補足図 7-3)。また、年別の残差は 0 周辺に分布することが確認された (補足図 7-4)。ベストモデルを用いて標準化 CPUE を求めたところ、標準化 CPUE の年トレンドは概ねノミナル CPUE (沖底 CPUE を平均値 1 となるよう規格化した値) と類似したトレンドを示したが、一部で標準化 CPUE とノミナル CPUE との乖離がみられた。2018 年以降ではノミナル CPUE が標準化 CPUE と比べて低い値を示していたが、2023 年と 2024 年はノミナル CPUE の方が高い値を示した (補足図 7-5)。これは、ノミナル CPUE では近年努力量割合が相対的に低下している常磐海区の資源動向を反映しにくいことが一因と考えられる。標準化 CPUE では、海域ごとの年トレンドは海域面積比で重み付け平均されることで、ノミナル CPUE に含まれる各海域の努力量の違いによる影響が補正されたと考えられる。



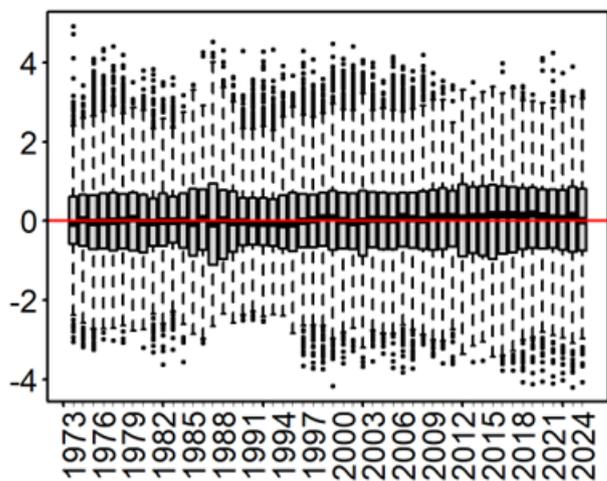
補足図 7-1. 操業ごとの LogCPUE のヒストグラム



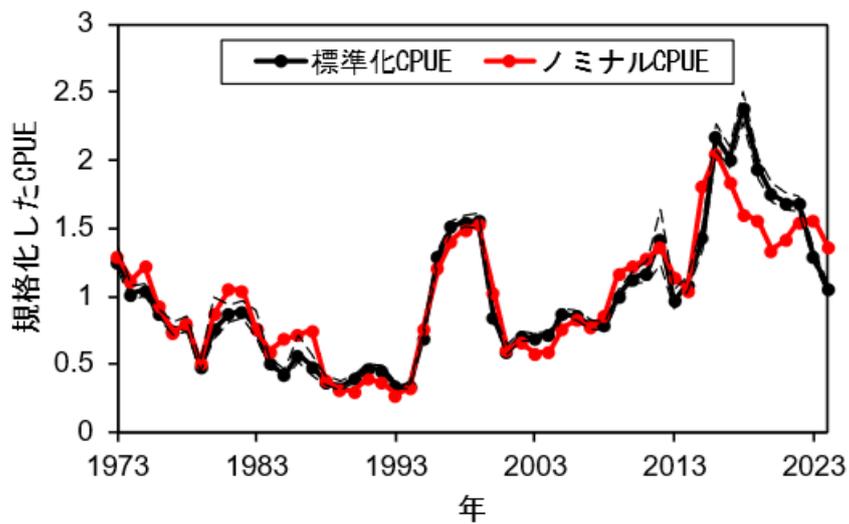
補足図 7-2. モデルの予測値と実測値の残差ヒストグラム



補足図 7-3. モデルの予測値と実測値の正規確率プロット



補足図 7-4. 年ごとの残差 箱ひげ図は第一～第三四分位、バーは最大値、最小値の 1.5 倍、バーの外側は外れ値を示す。



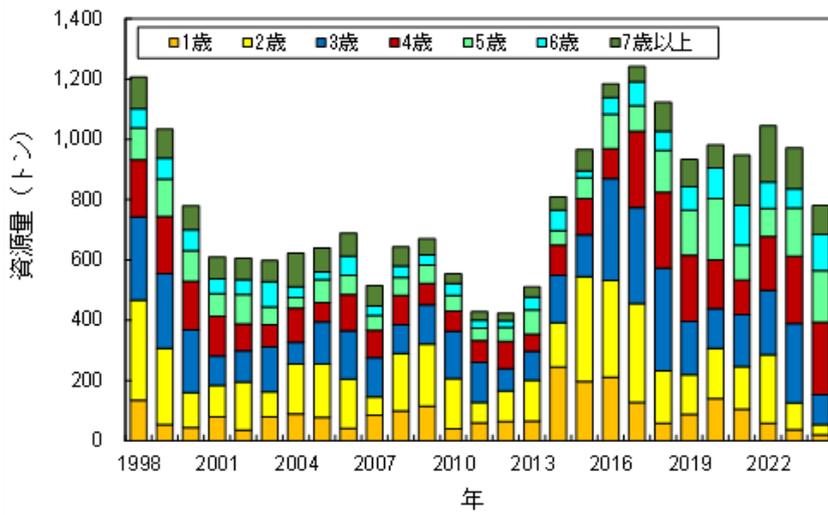
補足図 7-5. ノミナル CPUE と標準化 CPUE の時系列変化 それぞれ平均値で除すことで規格化した。

補足資料 8 稼働率を用いたコホート解析計算結果

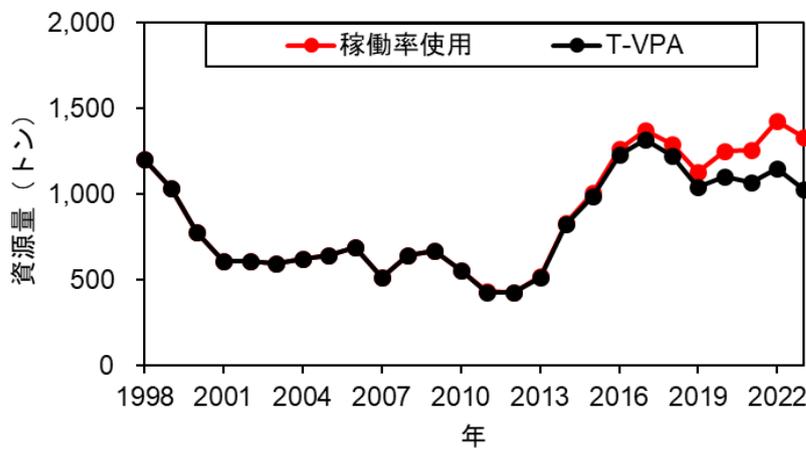
震災後の漁業の影響を考慮するため、主要な漁場である金華山～房総海区における震災前後の沖底の網数を稼働状況の指標として稼働率〔震災以降の最大網数（2022年の18,254網）を2005～2009年の平均網数（25,321網）で除したもの〕を求め、その値で2024年を除く直近5年間（2019～2023年）の平均F値を補正してコホート解析を行った。また、コホート解析の方法は補足資料2（ステップ1）と同様である。

その結果、2024年の資源量は780トンと推定された（補足図8-1）。資源量は、2000年以降では2014年から増加して2017年に1,241トンを記録し、その後横ばいで推移したが、2022年以降は減少していた。稼働率を考慮した場合の資源量は、標準化CPUEでチューニングした場合とほぼ同様であった（補足図8-2）。また、稼働率により補正したコホート解析のレトロスペクティブ解析を実施した。その結果、データの追加・更新が行われることでF値には大きな偏りはみられなかったものの、資源量は過大推定の傾向とともに比較的大きな変化がみられ（補足図8-3、8-4）、標準化CPUEでチューニングした場合（補足図2-2）の方がデータの追加に対する頑健性は高いと考えられた。

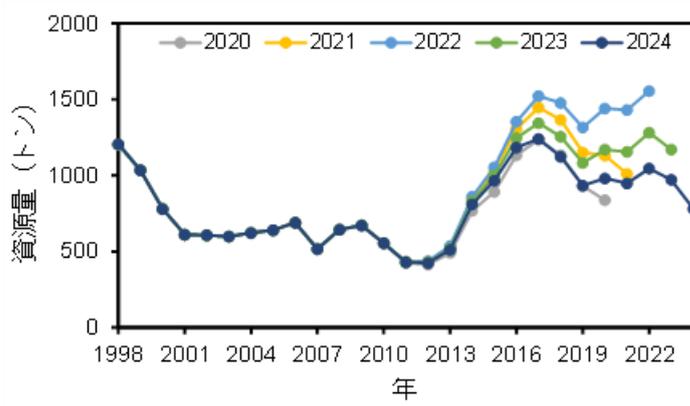
本資源の主漁場は福島県沖で、震災後から2021年3月まで同海域での操業は試験操業にとどまっていたが、現在は本格操業への取り組みがなされており、網数も順調に増加している（図3-4）。また、震災後の福島県における漁獲量は茨城県の漁獲量を下回っていたが、2019年以降は福島県における漁獲量が最も多い（図3-1、3-2）。そのため、ここでは標準化CPUEによるチューニング結果を重視し、稼働率で補正したコホート解析結果については補足資料への記載に留めた。



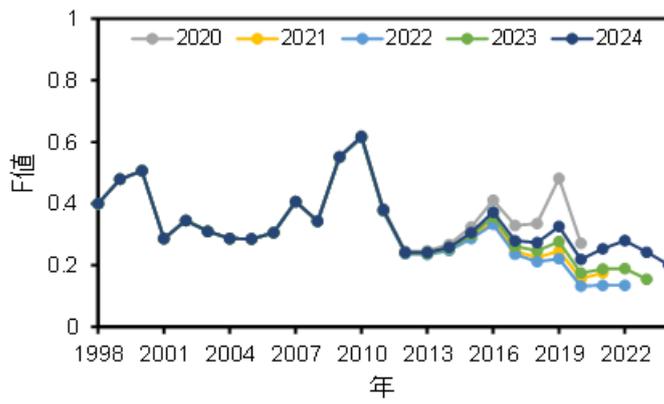
補足図 8-1. 稼働率で補正したコホート解析によって求めた年齢別資源量の推移



補足図 8-2. 稼働率で補正した場合と標準化 CPUE でチューニングした場合のコホート解析結果 (資源量) の比較



補足図 8-3. 稼働率で補正したコホート解析による資源量推定値のレトロスペクティブ解析結果



補足図 8-4. 稼働率で補正したコホート解析による F 値のレトロスペクティブ解析結果